次ページへ続く

Continued on next page...

逸翁美術館蔵国文学関係資料解題

逸翁美術館（池田市）は、小林一三翁（逸翁）一代のコレクションを収録した美術館としてつとに知られている。美術品数千点を蔵するという量の多さとともに、重要美術品二十二点を含むという質の高さによっても、そのコレクションのすばらしさが知られるであろう。数多くの茶道具・書画・什器など貴重な品々にまじって、古筆切・絵巻・冊子等の国文学関係の資料も少くない。このような次第で、文献資料部ではかねてから調査を進めてきたが、さらに解題までもっていくことを計画し、五十五年、五十六年度と科学研究費補助金（一般B）の交付を受けた。ここに報告するのは、書誌的な解説に一応限定しての成果の一部である。ただ同美術館には、ここに取りあげた以外に俳諧関係の短冊・画賛類の数の方がむしろ多い。今回はメンバーの専門などとの関係から収めることができなかったが、近いうちに別の企画によって全体的な調査を進めたい。その折、あらためてここに概略した書目についても、さらに詳細な検討を加えたく思っている。

なお、科学研究費による調査・研究の経過を述べると、当初は大久保正文献資料部長を研究代表者とし、伊井春樹・島原泰雄・高田信敬・今西実（天理大学教授）が研究分担者としてメンバーを組んだ。しかし、五十五年九月一日、大久保部長は突然の御不幸により御永眠なさってしまった。私たち一同、ことばには尽くせない深い悲しみを味わった。科学研究費交付決定後のことでもあり、メンバー一同協議した結果、伊井が研究代表者となり、計画通りとにかく進めることにした。このようにして、どうにかまとめられたことを、故大久保部長の御霊前に報告したく思う。

なお、この略解題を執筆するにあたっては、いく人かの調査員による調査カードを参照させていただいたし、五十六年度は当部に赴任された新藤協三氏の御協力も得た。さらに、最後になったが、とくに逸翁美術館館長岡田利兵衛、主事小野幸吉、学芸員安川剛の各氏には、たびたびの調査等で御助力を得たことを深謝申し上げる。

佐竹本三十六歌仙絵切（高光）　一軸　一

伝良経筆・藤原信実絵　三五・九×五九・四㎝　箱書「高光朝臣像　藤原信実画　後京極良経公　壱幅」とし、蓋裏に「壬戌五月古筆了任」とした識語あり。

重文指定。

右近衛権少将正五位下藤原朝臣高光

右大臣師輔八男母延喜第二女雅子内親王

応和元年十二月五日出家法名如梵宇多

武峯少将

かくはかりへかたく見ゆるよの中に

うらやましくもすめる月かな

（高光の彩色肖像）

歌仙切（貫之）　一軸　二

室町時代写　二五・四×四三・六cm

木工権頭従五位上紀朝臣貫之先祖不見

延喜六年初在位天慶九年卒

醍醐　朱雀

さくらちるこのした風はさむからて

そらにしられぬ雪そふりける

（貫之の彩色肖像）

部類名家集切（深養父集）　一軸　三

伝貫之筆四一二　二六・二×二三・七cm　極札「紀貫之あひしりてくもゐにも琴山」

（内箱に貼付）

あひしりてはへりけ□ひとのあ□まへまかり

けるをおくりて

くもゐにもふかきこゝろのおくれねはわかる

とひとにみゆはかりなり

雑部

春　山　瀧

松　夢

古今集切（関戸本）　一軸　四

伝行成筆巻十五恋五、七九四―七九六　二〇・三×一六・五cm

九行　金銀箔砂子散し料紙　九行

みつね

よしのかはよしやひとこそつらからめは

やくいひてしことはわすれす

よみひとしらす

世中の人の情は花染の移やすきも

のにさりける

こゝろこめうたてにくけれそめさ

らは移こともをしからましや

をのゝこまち

和泉式部集切　一軸　五

伝行成筆　和泉式部続集切　Ⅱ三八一・三八二　二〇・七×一〇・二㎝　六行　箱書「藤原行成卿和泉式部集切」

またおなしことかたらふ女方たちのもとに
たなはたにおとる許のなかなれとこひわたらし
なかさゝきのはし
七月八日男のもとにやるとてよませし
いむとてそ昨日はかけすなりにしを今日ひこ
ほしの心ちこそすれ

和漢朗詠集切　一軸　六

伝行成筆伊予切　巻上秋二七九―二八一　二五・五×一七・五㎝　七行　外箱「伊予切女郎花」、内箱「行成卿伊予切女郎花」「大正十三年六月贈横井君、松下軒与」　伊予松平家・横井庄太郎旧蔵

女郎花
花色如二蒸粟一俗呼為二女郎一聞名戯欲レ
契二偕老一恐悪衰翁首似二霜皿一
をみなへしおほかるのへにやとりせは
あやなくあたのなをやたつへき野英材
をみなへしみるにこゝろはなくさま
ていとゝむかしのあきそこひしき清慎公

藍紙本万葉集切　一軸　七

伝公任筆　巻十八、四一三二―四一三四　二八・七×二五・四㎝　銀箔散し薄藍色料紙、箱裏に「大納言公任卿」と記す。

口論時合時何題強吏乎尋誦針装詠詞
泉酌不渇抱膝獨咲能蠲旅愁陶然遣
日何慮何思短筆不宣
勝寶元年十二月十五日徴物下司
謹上　不伏使君記室
別奉云々歌二首
多々佐小毛可尓母与己佐母夜都故等曾
安礼波安利家流奴之能等乃度尓
たゝさにもかにもよこさもやつこと
そあれはありけるぬしのとのに
波里夫久路己礼波多婆利奴須里夫久路
伊麻波衣天之可於吉奈佐備勢牟
はりふくろこれはたはりぬすりふくろ

いまはえてしかおきなさひせん

宴席詠雪月梅花歌一首

由吉乃宇倍尓天礼流都久欲尓鳥梅能播
奈乎理天於久良牟波之伎故毛我母

ゆきのうへにてれるつくよにうめの花
をりておくらんはしきこもかも

堺色紙　一軸　八

伝公任筆　古今集巻七賀三四四　二八・七×二五・四cm　銀泥花鳥蝶下絵料紙　箱書「四条大納言公任卿之色紙」、極札有り、

わたつみのはまの
まさこをかすへ
つゝ
君かへむよの
有かすに
せむ

後撰集切　一軸　九

伝定頼筆烏丸切　巻三春下（一二六）・一二一・一二二　二〇・九×一七・一cm　金銀箔散し料紙　箱に「行成卿たちもかへらす 山琴」の極め貼付

たちもかへらすきみとまれとか
はなさかりまたもすきぬによしのかは
かけにうつろふきしのやまふき

人のこゝろのたのみかたくなり
ゆきけれはやまふきのはな
のちりさしたるをゝりてこれ
みよとてつかはしける

しのひかねなきてかはつのをしむを
もしらすうつろふやまふきのはな

三月はかりに花さかりにみちまか
るとて

二十巻本歌合切　一軸　一〇

伝俊忠筆（二九七）元永元年十月十一日内大臣忠通歌合一　二四・三×二二・七cm　箱蓋裏に「俊忠卿同家哥合 山琴」の極札貼付

同家哥合元永元年十月十一日当座出題講師次探披分左右

題雨後寒草

歌人相府季房師俊盛家尹時皿基忠隆朝隆

判者俊頼朝臣　清菊　盛定

一番　雨後寒草

左勝　内府

あめはるとみくまのゝのにかせふけは
をきのかれはにたまそちりける

麗花集切　一軸　一一

伝小大君筆香紙切　二三　二〇・七×一一・一cm　七行

中つかさ

ゆくみちも春けきものをほとゝきす
こゑにこゝろのとまりぬるかな

むらかみの御ときのうたあはせ

よみ人しらす

あふことをいつかとまつにあやめくさいとゝ
こひちにしけるめるかな

新古今集切　一軸　一二

伝民部卿局筆　巻六冬五九五・五九六　二二・一×一二・〇cm　五行　箱蓋に「民部卿局秋篠切」とし、極札にも「なかめつゝ民部卿局（印）」「民部卿局なかめつゝ（印）」とあるが、後撰集の秋篠切ではない。

なかめつゝいくたひそてにくるるらむ
しくれにふくるありあけの月

題不知　源泰光

さためなくしくるゝそらのむらくもに
いくたひのおなし月をまつらむ

西行続三十六番宮河歌合　一軸　一三

伝西行筆月輪切　七二・七三　二五・四×一〇・五cm　七行

卅六番

左

あふとみしそのよの夢のさめてあれな
なかきねふりはうかるへけれと

右

あはれ〳〵このよはよしやさもあらはあれ
こむよもかくやくるしかるへき

歌仙切（信明）　一軸　一四

伝後鳥羽院筆　一四・四×一三・九cm　箱蓋「後鳥羽院御筆」とするほか、了仲・了音の添状あり。

但馬守信明

こひしさはをなし心にあらすとも
こよひの月を君みさらめや

（肖像画あり）

古今集切　一軸　一五

伝後鳥羽院筆　巻十九雑体（一〇〇二）　一六・一×一五・五cm　一一行　箱蓋「後鳥羽院」、極札「後鳥羽院いせのうみの 山琴 」とする。

いせのうみの　うらのしほかひ
ひろひあつめ　とれりとすれと
たまのをの　みしかき心
おもひあへす　猶あらたまの
としをへて　大宮にのみ
ひさかたの　ひるよるわかす
つかふとて　かへりみもせぬ
わかやとの　しのふくさおふる
いたまあらみ　ふるはるさめの
もりやしぬらむ
　ふるうたにくはへてたてまつれる

和漢朗詠集切　一軸　一六

伝頼政筆平等院切　巻下 セ二三―七三三　二七・八×四七・九cm　一七行　打ち曇り鳥の子料紙　箱書「詩歌　源三位頼政筆」、「源三位頼政筆平等院切」　古筆了仲外題」とした包みに、「源三位頼政卿老人 山琴 」の極札あり。

老人

昔為京洛聲花客今作江湖潦倒翁（白）
老眠早覚常残夜病力先衰不待年（白）
再三憐汝非他事天寶遺民見漸稀（白 唐風）
紅栄黄落一樹之春色秋聲結緩抽
簪一身之壯心老思（太政大臣致仕第一口 菅三品）
少於楽天三年猶已衰之齢他遊於
勝地一日非是老之幸哉（尚会由序 菅三品）
太公聖之遇周文渭濱之波畳面
綺里季之輔漢恵尚山之月垂眉□（舜考□ 匡衡）
水無反晩流年涙花豈重春暮齒粧（尚由会 菅三品）
林霧校聲鶯不老岸風論力柳猶強（已上 菅三品）
醉対落花心自静眠思餘算涙先紅（已上 尚由 雅規）
ますかゝみそこなるかけにむかひゐて
みるときにこそしらぬをきなにあふこゝちすれ
いつくにかみをはよせまし世中に

おいをいとはぬひとしなければ

貫之集切　一軸　一七

伝寂然筆村雲切　I二八七・二八八・二八九　一六・七×一二・四cm　七行　白紙に金銀切箔の料紙

箱蓋に「伝寂然筆定家卿加筆義（花押）」とするように、本文の訂正・集付は定家の所為と思われる。

あき

おほそらをわれもなかめてひさから（こほし）の
つまひこよさへひとりかもねむ（新古今）
をみなへしにほひをそてにうつしては
あやなくわれをひとやとかめむ
ゆくみつのこゝろはきよきものなれと
まことゝおもはぬつきそみえける（る）

時代不同歌合切　五軸　一八

伝筆者未詳　室町写　歌仙絵（参議篁・西行法師）二軸、歌合切三軸　篁一六・一×二五・七cm　西行一六・七×二七・〇cm　歌合①一三・九×一七・九cm　②一四・八×一七・六cm　③一四・二×一八・二cm　箱蓋に「時代不同歌合切西行法師参議篁」と打付書き。

①十番

左

わたのはら八十嶋か
けてこいてぬ
とひとにはつけよ
あまのつり舟

右

ふりつみてたかね
のみゆきとけにけり
きよたきかはの水の
しらなみ

②十一番

左

おもひきやひなのわか
れにおとろへてあまの
なはたくいさりせむとは

右

あきしのやとやまの
さとやしくるらむい
こまのたけにくも
のかゝれる

③十二番

左

かすならはかゝらまし
やはよのなかにいとかな
しきはしつのをた
まき

右

なけゝとてつきやは
ものをおもはするかこ
ちかほなるわかなみ
たかな

類聚歌合切　寛平御時后宮歌合　一軸　一九

伝俊忠筆伊丹切〔寛平五年九月以前〕皇太夫人班子女王歌合一七・一八（『平安朝歌合大成』）二四・九×一一・四cm　六行

「俊忠卿筆（伊丹切　九番　大外記極）」と記した包み紙に、

「御子左俊忠卿（はるなれと）　山琴」「伊丹切（寛平御時后宮歌　春廿番之内　九番左右歌二首　戊辰三月）」

古筆了任」とあり。

九番左　在原棟梁　興風　古今

はるなれとはなもにほはぬやまさとは
ものうかるねにうくひすそなく

右　興風古今

さくらはなちくさなからにあたなれと
たれかは春をうらみはてたる

伊勢集切　一軸　二〇

石山切　I（二七八）・二七九・二八〇・（二八一）　二〇・〇×一五・八cm　八行　松・花・飛鳥の下絵による料紙

箱蓋に「石山切（伊勢集　人こふる）」、蓋裏に「昭和五（庚午）初秋　鈍翁誌之」と墨書する。石山切は昭和四年に切られたので、これはその翌年鈍翁（益田孝、石山切の命名者）による箱書き。

なみたもはるのいろかはりけり
かへし
人こふるなみたはゝるそぬるみける
たえぬおもひのわかすなるへし
こくはを
くれなゐのなみたしこくはみとりいろの
そてもみちてもみえまし物を
くれなゐになみたうつるときゝしをは

伊勢集切　一軸　二一

石山切　Ⅰ一八一・一八二・一八三　二〇・五×一六・三cm　八行

飛鳥・紅葉模様、継紙料紙

ぬきためてかすもみるへくあらたまの
をはりにたにもあひみてしかな
我ことや雲のなかにも
おもふらんあめもな
みたもふりにこそふれ
みのうかむこともしられてはかなきに
をりたちぬへき心ちこそすれ

八条大将四十賀権中納言のし給

和漢朗詠集切　一軸　二二

伝定信筆戊辰切　巻上秋、早秋二〇八・二〇九・二一〇・二一一　二八・八×一五・〇cm　六行　天地に金・銀の砂子を霞に撒き、切箔を散す。

早秋

但喜暑随三伏去。不知秋送毛来白
槐花雨潤新秋地桐葉風涼欲夜天白
炎景剰残衣尚重。晩涼。潜到簟先知紀
秋たちていくかもあらねとこのねぬる
あさけのかせはたもとさむしも安芸大君

後撰集切　一軸　二三

伝西行筆白川切　巻十恋二　六二九　一七・六×一四・九cm　一一行　箱蓋裏に「西行法師人のもとに白川切牛庵」の極め札。

人のもとにしは〳〵まかりけ
れとあひかたきけしき
のみえはへりけれはものに
かきてつかはしける
もとかた
くれぬとてねてゆくへくも
あらなくにたとる〳〵もかへる
まされり
おとこあひそへるおんなを
いとせちにいはせはへりけ
れはおんないとわりなしと

古今集切　一軸　二四

伝寂蓮筆右衛門切　巻一春上五九・六〇　一九・七×一三・七cm　七行　①「一寂蓮法師／正筆出来宜敷／二月廿四日　古筆了延／千賀通

円様」②「四半古今集歌切世々右衛門切と称ふるもの也」㊞寂蓮法師正筆」の添状・極札あり。

さくらはなさきにけらしなあしひきの山のかひより見ゆる白雲

寛平御時きさいのみやの哥合の哥　とものり

みよしのゝ山へにさけるさくらはなゆきかとのみそあやまたれける

和漢朗詠集切　一軸　二五

伝寂蓮筆　巻上秋二八六―三〇〇　二九・〇×一六・〇cm　八行　打曇料紙

箱蓋裏に「源三位頼政卿（闕前頭更有）心養平等院切（朱）」とする極札貼付するが、「平等院切」の文字を消し、「（朱）頼政卿ハ誤／寂蓮法師正筆也」とした朱筆による薄様紙を貼る。

蘭

前頭更有蕭條物老菊衰蘭三両叢（白）
扶桑豈無影乎浮雲掩而忽昏叢蘭豈不芳
乎秋風吹而先敗（兎裘賦　前中書王）
凝如漢女顔施粉滴似鮫人眼泣珠（紅蘭受露）
曲驚楚客秋絃馥夢断燕姫暁枕薫（蘭気入軽風直幹）
ぬしゝらぬかはにほひつゝあきのゝにたか
ぬきかけしふちはかまそも　素性

自詠切　一軸　二六

伝慈鎮筆　一八・三×一四・五cm　四行　箱蓋に「（天台座主）慈鎮和尚自詠一首」と打付書き、軸末に「吉水和尚自詠切（世に名物切なり）」と記す。

旅の心をよみ侍ける　前大僧正慈円

かへりこはかさなるやまのみねことにとまるこゝろをしほりにはせん

歌切　一軸　二七

伝慈鎮筆　内容は「源氏狭衣歌合」九十四番左　一五・七×一五・二cm　一四行箱蓋に「慈鎮和尚御筆（歌物）」と打付書き。

とうの中将ときこえし時六条の院の中将にものしたまひ

しときうちより常陸宮に
かくろえいりてのちちかきこう（ママ）
はいのかけにたちより給にも
とよりたちかくれてふりす
てさせ給へるつらさに御をく
りしつるはとて
さきの太政大臣
もろともにおほうちやまにいて
つれといるかたみせぬいさよひの月

右こうひてんのとをゝしたて
させ給に人の御ためもいとをし
かるへきことなとおほしめしつゝけて

歌切（堀川院百首）　一軸　二八

伝定家筆　一五・一×一二・五cm　八行　外箱蓋に「定家卿二首の和歌（箱書付小堀遠州筆）」、内箱蓋に「二首の和歌（定家筆）」と打付書き。また極札には「定家卿（所二首切ことしおひの）　山琴」「（箱蓋書付）小堀遠州筆（戊辰六）　了延」とある。

ことしおひのまかきの
うちのくれたけも
秋はよなかくなりや
しぬらむ

苔

おくやまのいはねかうへのこけ
むしろたちぬるくものあと
たにもなし

落葉制　一軸　二九

伝西行筆　二九・四×一五・〇cm　四行　外箱蓋に「落葉詠歌　西行法師筆」、内箱蓋に「西行法師落葉」と記す。

また、箱蓋に「西行歌寺落葉（添状光広卿筆）」とする。光広による真跡である旨の添状一巻が付される。極札には「西行法師（こけふかき烏丸光広卿筆状）　山琴」「落葉切（癸卯三）　了音」とある。

寺落葉

こけふかきふもとのてらを
きてみれはこのはにひゝく
いりあひのかね

五首切　一軸　三〇

伝定家筆　一六・六×一四・〇cm　一〇行　箱蓋「京極黄門定家卿（五首切）」、極札「京極黄門定家卿（しらせはや）　山琴」「五首切（壬寅）五　了泉」、また別に次のような「鑑定書」が付される。

歌切

しらせはやょりおもひたえ
にきまて十行先祖京極
中納言定家卿真跡無
相違候也
明治卅五年七月廿一日 冷泉家印
従二位伯爵冷泉（花押）

しらせはやあまのもしほのたれゆへに
ほさてとしふるそてのゆくゑを
いせのうみのをのゝみなとのおのつから
あひみるほとのなみのまもかな
しられしなやきてのあまのしほけふり
くゆるおもひのむねにみつとも
あふさかのゆきゝはみちもゆるさねと
なみたをとむるせきもりはなし
こひしなぬみのつれなさをなけきにて
あひみむまてはおもひたえにき

記録切　一軸　三一

伝定家筆　一六・〇×一五・一cm　九行　箱蓋に「定家卿真筆下馬之色紙」と打付書き。

下馬所事
寛治　左府以下於一鳥居下馬案子細
於大慢門下可下馬也
近仗等同於此所下馬
応保　公卿以下於西鳥居下馬
橋下立五位下馬標
延久　関白於鳥居内下車
祇園
寛治　人々於大慢門下馬

文切　一軸　三二

伝定家筆　二九・〇×三六・〇cm　六行　箱蓋に「定家公私障難文」とし、裏には軸表装の覚、および「南都一乗院之宮／御払物の内／明治戊寅年春」の紙片貼付。

公私障難頗匪直也事候
節拝不当仁候間心中承
得候逐日仰天候散班老

存外経営大略今度改候
随廻愚案全申案内候也
一日

明月記切　一軸　三三

定家筆　二九・四×四三・五cm　二五行　（為村卿添状）「記録切廿五行／（殿少将令参出居一奥所見之儀也）／右京極黄門真蹟／無疑候尤可有秘蔵／者也　冷泉前中納言／宝暦二年十二月十七日（花押）」

指図切　一軸　三四

伝定家筆　二一・〇×二六・八cm　箱蓋に「御宝蔵月」「月」の紙片貼付、「定家指図記録」と打付書き。

「寝間」「廊大十間」「池」「馬場」「南」と指図に注記を添える。

古今集切　一軸　三五

伝飛鳥井雅経筆今城切　巻八離別三七七　二五・三×一五・四cm　六行　箱蓋「飛鳥井雅経卿家隆　了仲極」、極札「飛鳥井殿雅経卿（えそしらぬ今城切）」

あかつきにたつとてまかりまうしゝ
けれはをんなのよみていたせり
ける　よみひとしらす
えそしらぬいまこゝろみよいのちあらは
われやわするゝひとやとはぬと

後拾遺集切　一軸　三六

伝実朝筆中院切　巻十哀傷五四二・五四三　二一・四×一三・八cm　九行

おくれしとつねのみゆきはいそきしを
けふりにそはぬたひのかなしさ
長保二年十二月に皇后宮うせさせ
たまひて葬送のよゆきのふりて
侍ければつかはしける
一條院御製
のへまてにこゝろひとつはかよへともわか
みゆきとはしらすやあるらむ
入道前太政大臣の葬送のあしたに
けるときにひとのいへにやとりて

和漢朗詠集切　一軸　三七

伝世尊寺行能筆　巻下眺望六二四―六三〇　二九・二×三六・五cm

一〇行「世尊寺　了仲極札」と記した包み紙に「世尊寺殿行能卿風飜白浪山琴」の極札、また別に古筆了珉の書状あり。

風飜白浪花千片鴈點青天子一行
出紫闕而東望山岳半挿雲根之暗
躋翠嶺而四顧家郷悉没煙樹之深
見天台山之高巌四十五尺浪白望
長安城之遠樹百千萬茎薺青
江霞隔浦人煙遠湖水連天鴈點遙
一行斜鴈雲端滅二月餘花野外飛
老眼易迷残雨後青情離緊夕陽前
見わたせはやなきさくらをこきませて
宮こそはるのにしきなりける。

和漢朗詠集切　一軸　三八

伝為家筆井ノ口切　巻下刺史下六九〇―六九三　三〇・三×一九・四cm　七行

刺史

士女笙歌宜月下使君金紫称花前早春憶蘇州寄夢得

精明合浦ノ珠相似断割崑吾ノ劒不如贈亘玄上李尚書詩
雖三百盃莫強辞辺上不是醉郷此ノ一両
句可重詠北陸豈亦詩国鉄能州刺史赴任勧酔惜別序保胤
たかきやにのほりてみれはけふりたつ
たみのかまとはにきはいにけり大和國天皇御製

和漢朗詠集切　一軸　三九

伝為家筆井ノ口切　巻下僧六〇四―六一二　二九・八×三七・八cm

一五行「為家卿筆井の口切極　六七」と記した包みに、「中院禅門為家卿僧蒼霧山琴」「井の口切　朗詠集詩歌昭和丁卯了任」とする極札あり。

僧

蒼茫霧雨之霽初寒汀鷺立重畳煙嵐之断処晩寺僧帰鉄関賦読
野寺訪僧帰帯月芳林携客醉眼花贈東都超尭夫処士鮑溶
堂有母儀莫以逗留於中天之月室有師跡
莫以假息於五台之雲鉄俞上人赴唐序保胤鉄入唐偈
明鏡乍開随境照白雲不著下山来野相公
観空浄侶心懸月送老高僧首剃霜頌
鶴閑翅刷千年雪僧老眉垂八字霜和藤賢才子源為憲

たらちねはかかれとてしもむはたまの
わかくろかみをなてすやありけむ良僧正
よのなかをうしのくるまのなかりせは
おもひのいゑをいかていてまし 業平
みわかはのきよきなかれにすゝきてし
わかなをさらにまたやけかさん 玄賓

源氏狭衣百番歌合切　一軸　四〇

伝為家筆姫路切　五十五番右　一七・〇×一三・八cm　三行　金銀切箔雲母霞の料紙　「極　了佐」とした包み紙に「為家卿よもすから 山琴」の極札、箱書は「為家朝臣姫路裂郭公詞」と記す。

きすをきかせたまひて
よもすからなけきあかしてほととぎす
なくねをたにもきく人もなし

新勅撰集切　一軸　四一

伝為家筆　巻十六雑一、一〇五九・一〇六〇　二三・五×一四・四cm　九行　箱蓋に「為家卿歌切おもひきや」の紙片貼付。

四月まつりの日あふひにつけて
女につかはしける
藤原顕綱朝臣
おもひきやそのかみ山のあふひくさ
かけてもよそにならむものとは
題しらす　相模
あとたえて人もわけこぬ夏くさの
しけくもゝのを思ころかな
ゆふつく夜おかしきほとにくひな

新古今集切　一軸　四二

伝後鳥羽院筆水無瀬切　巻十六雑上一五一九・一五一八（誤写により順序差し替えの符号あり）　八行　「後鳥羽天皇ありあけの 山琴」「四半切水無瀬切ト称呼し奉る名葉なし新古今和歌集第十六雑歌上部一表己卯（印）」の極札と別に一枚あり。

前大僧正慈円
ありあけの日のゆくゑをなかめてそ
のてらのかねはきくへかりける
摂政太政大臣大将に侍し時月哥五十
首よませ侍けるに
やまさとに月はみるやとひとはこす
そらゆくかけそこのはおもとふ
おなし家の哥合に山月のこゝろ

色紙（古今集歌）　一軸　四三

伝後柏原院筆　巻三夏一五六（貫之）　一九・四×一六・九　散し書き　箱書「後柏原院御宸翰御色紙夏のよは」、極札（箱蓋裏貼付）「後相原院夏の夜は（印）」　朱色地に竜下絵料紙

夏の夜はふすかとすれは郭公なく一こゑに明るしのゝめ

小色紙（古今集歌）　一軸　四四

伝後西院筆　巻七賀三五七　一五・六×一二・六cm　三行　極札「後西院かすか野に牛庵」　薄緑地桐花菊模様料紙

かすか野にわかなつみつゝ
万代をいわふ心は
神そしるらん

歌合切　一軸　四五

伝後光厳院筆

各七・五×八・五cm　一面一〇行　箱書「後光厳院御筆」、極札「□光厳院（印）」「古筆竪定家開祖了佐門人嘉右衛札」とする。

廿七番

左　親時

あめ露のめくみにもれぬ
我ならはふりまさる身の
かひやあるへき

右　宗経

うきなからさてとし月を
すきの屋にわか身ふり
そふ雨のをとかな

これもともにおなし風せいに候か」

凡右はやさしきやうにみえ候
ふるく候はすは凡右はかちと申たく候

廿八番

左　寄月懐旧　隆有

人も世もむかしなからの
月をのみうはのそらなる
かた身とそみる

右　親時

たれか又なかめもかよふ
わかしのふおなしむかしの

建礼門院右京大夫集切　一軸　四六

伝後光厳院　二〇六　二五・〇×一三・六cm　九行　箱蓋裏に「後光厳院いかにして切（印）」「詞切　壬午二（印）」の極札貼付。

いかにしてかあらんされはいかにしてか
せめてかくおもふことをいはむなとおもふ
もかなふましきかなしさこゝかしこ
うきたちたるさまなとつたへきく
もすへていふへきかたそなき
いははやとおもふことのみおほかるも
さてむなしへやつゐになりなん
おそろしきものゝふともいくらも下
なときけはいかなることをいつきかんと

風早実種詠草　一軸　四七

三一・八×四〇・八cm　箱書「霊元天皇宸点風早実種卿詠草篭梅」

天満宮御法楽
篭梅

軒近く匂ひしへみちてを
さく梅に枝かはす松の
老やかくれむ
咲匂ふ枝には露も
あたゝかに南の軒の
梅の初花

○百十二

元禄四辛未正廿五／天満宮御法楽／仙洞御添削

大懐紙　一軸　四八

発然　四〇・三×五五・五cm　端書「コノヘ様和歌発然公春懐紙」

詠初春祝道

和歌

発然

いのりける我たつ
杣の法のみちも君
かためなる千世
の初春

詠草　一軸　四九

有栖川宮阿計丸　一六・二×四三・四cm

阿計丸上

紅葉

紅葉するはやまの秋の

みねかけてなかめもふかき
千しほそめけり

土御門院百首切　一軸　五〇

伝尊海筆　二四・四×一一・六cm　六行　箱蓋裏に「真光院尊海　難波江や　景頼」の極札貼付。

難波江や間はらに見えし蘆の葉もめくめはかてに
駒そいさむる

此詞こそ勝之候へ

帰鴈

みよし野の花にわかるゝ鴈金もいかなるかたへよる
となくらん

面白し

喚子鳥

二首詠草　一軸　五一

伝宗長　二六・〇×三七・五cm　軸表紙に「連哥師宗長老筆　山琴」の極め貼付。小堀遠州表具出来の文・古筆了佐、遠州宛消息・遠州消息、各一通あり。

宗長

羇中
見花

われならぬ人もとめぬにとまるかと
いさことゝはむ花の関守

山家

秋月

軒端なる杜の木間をもる月の
影さためなき秋の山風

春日懐紙　一軸　五二

伝学乗筆　二八・〇×四三・七cm

詠三首和歌　学乗

月

物思はてこゝろのまゝになかん
らんこよひの月をひとに
とはゝや

鹿

たかさとのなみたのつまと
なりぬらんしかのねわ く
るのへの秋風

虫

さむしろやつゆのまくら
のきり〳〵すねさめよふか[く]
こゑよくるなり

二首懐紙　一軸　五三

伝武田信玄　二九・七×四七・八cm　極札「武田大膳大夫晴信（冬日詠二首和歌）（冬夜難曙行かへり）（印）」「二首懐紙（戊戌）十一（印）」

冬日詠二首和歌
晴信
冬夜難曙
行かへり夢はいくたひ
かはれともおなし氷の
むすふたまくら
常磐木
草も木も庭はひとつに
うつもれて軒はの松に
あまるしら雪

懐紙　一軸　五四

伝義政筆　二九・四×三八・六cm　極札「慈照院殿義政公（かゝけても年号御名）」「哥一着（判有）[山琴]」「四了音（壬戌）」

かゝけてもつきぬひかりや
たか野山あかつきとをき
法のともしひ
文明八年十月廿一日
従一位源朝臣義政（花神）

片仮名切　一軸　五五

伝時頼筆　一六・〇×八・五cm　箱蓋裏「最明寺殿時頼朝臣（クモヲハ）（印）」の極札貼付。

クモヲハ（サヽカニト云）　ニクサシ（フネミヤシヲナミカケタルヲ云）
カサヽキノハシトハ（タナハタノアマノカハニスム日ワタスナリカサヽキト云トリノアマタシテハネヲサシチカヘテタナハタヲワタストカヤ）
ユフトハ（ユフヤウナル物ヲサカキニカケタルナリマタモチヲモユフト云）
モトアラノハキトハ（モトノヒロカリタルハキナリ）
ヲホヌサトハ（ユフクレノツラヲイフマタハウヘスルシチヲモ云）
ツカノマトハ（メモアハセヌホトヲ云　時云トキノホトヲイ）

短冊　一軸　五六

伝義政筆　箱蓋「義政公短冊梅薫風」

梅薫風　玉たれのみすのひまよりほのかにも
　　にほひをおくる風のむめか香義政

小色紙二枚貼（漢詩・和歌）　一軸　五七

伝東常縁筆　①一六・五×一四・九cm　②一六・八×一五・〇cm　箱蓋「東野州筆色紙扁舟蘆晴ありあけの」、蓋裏「小竹園主人識」

①扁舟蘆晴／秋風泊／旅店柴疎／暁月局

②ありあけの／つれなくみえし／わかれよりあかつき／はかりうき／物はなし

懐紙　一軸　五八

伝山内持豊筆　三二・二×四七二cm

山雪
　前権中納言持豊
かゝみ山雪の
　ひかりのまはゆさに
　　老はたちよりて
　　みるへくもなし

短冊　一軸　五九

伝牡丹花肖柏筆

暁時雨　ねぬるまはとたえをゝきて玉くしけ
　　あけかたき夜をとふ時雨哉牧丹花

懐紙　一軸　六〇

伝紹巴筆　二七・九×四二・二cm　箱蓋「里村紹巴法眼懐紙柳糸緑」、蓋裏「桂月庵言理記」、極札「里村紹巴法眼一首懐紙雪ふれは琴山」「詠柳糸緑新和歌巳丑四了伴」

詠柳糸緑
　新和歌
　　法橋紹巴
雪ふれは柳か
えたのしら糸をみと
りにそむる春雨
のそら

短冊　一軸　六一

伝紹巴筆

於朝熊　夜半にいる空もおしまし行末の
　　月のひかりの朝くまの山紹巴

短冊　　一軸　六二

伝紹巴筆　箱蓋「法眼紹巴筆」、極札「臨江斎法眼紹巴山路わけ 水汲 」
「短尺名アリ未巳 十二（印）」

山路わけとひくる人のかくれかに
　すますはしらしすめる心を紹巴

懐紙　　二軸　六三

伝烏丸光広筆　各二八・九×四二・三㎝　光胤の新平三品宛の光広
真筆と証した書状あり。

①　暮秋河
　　光広
たつ田川与
し紅葉は
　なかるとも
秋をとゝむる
しからみもかな

②　春月
　　光広
半天の月の
うへにはふく程も
よはの春風
　かすみ
　出つゝ

懐紙　　一軸　六四

伝烏丸光広筆　四八・九×五三・九㎝　「光広卿懐紙」と記した包
みに、「烏丸大納言光広卿竹為師はるになひく 水汲 」「一首懐紙戊午 冬（印）」の
極めあり。

春日詠竹為師
　　和歌
　　権大納言光広
はるになひく雪さへ
とけしくれ竹やすく
なる庭のをしへと
も見む

富士画賛　一軸　六五

伝烏丸光広　二八・八×五一・六cm

しら雪も
霞にまかふ
明ほのゝ
ふしの
高根に
花やさふらむ

（富士墨画あり）

短冊　一軸　六六

伝烏丸光広筆　金銀泥山水草下絵

した紅葉かつ散山のゆふしくれ
ぬれてやひとり鹿の鳴らん　光広

歌入文　一軸　六七

伝烏丸光広筆　三〇・二×四二・一cm　箱書「烏丸光広卿時雨歌」、「光広卿消息」とした包みに「烏丸光広卿（御手箇有名）水汲」「消息（庚午）冬（印）」の極札あり。

（消息略）
時雨行秋のけしきはおのつから
夕日さひしき野辺の色哉

新古今集切　一軸　六八

伝光悦筆　巻四秋上四一九・四二〇　三二・四×七九・二cm　雲母松鶴草花下絵鳥の子料紙

月たにも慰／かたき／秋の夜の／心もしらぬ／松の風かな
さむしろや／待夜の秋の／風ふけは／月をかたしく／宇治の／はし
姫

寛和二年六月九日内裏歌合　一軸　一三〇

伝俊忠筆　二六・六×三一五・五cm　表紙竜鳳凰牡丹唐草（布地）、見返し金銀箔押し。箱蓋「大内裏歌合、俊忠卿真蹟（元楽翁公御所有品）壱巻」、蓋裏「王政維新桑名候東京御移転之節御払下品之壱部也　矢田家珍蔵」、極札「俊忠卿（寛和二年）（印）」　国宝

本文は一番から二十番まですべてを収める。巻末には、紙を継いで次のような識語が付される。

這一巻俊忠卿御真蹟
分明也哉人依御所望乍

憚證之而已

明暦二年

閏卯月上旬　山琴　古筆了佐（花押）

和漢朗詠集　一三一

写本二軸。藍・紫の内曇り斐紙表紙に「伝藤原行成筆」「131　重美　和漢朗詠抄上（下）」の紙片を貼る。ただしごく近年のものである。内題「和漢朗詠抄上（下）」。紙高二七・七㎝。表紙幅二二・八㎝、本文紙幅五〇㎝程度。ただし上下巻とも最終料紙は幅狭く、礼紙を介さずして直接牙軸に付く。本文料紙は斐紙、見返しは本文共紙。

上巻三〇紙、下巻三二紙。全体に天地二三・二㎝、幅二・七㎝の淡墨界を引き、詩句は界間に一行、和歌は二行に書写する。全巻にわたって返点、片仮名傍訓・頭註（以上墨）、声点・縦点（以上朱）を施すが、本文とは別筆。上巻末に

雪　立（レハ）於庭上（ニ）頭（ヘ）為（クリ）鶴　坐在（ヰナアレハロ）爐辺（ニ）手不（スヲ）亀（レ）

としのうちにつくりし罪はかきくらし

ふる（？）しの雪とともにきへなん

と追補があって、これは頭註と同筆のようである。なお本文「雪」の部には、右の詩句の入るべき部分に〇印を墨書する。

その他裏書若干。一、二を示せば、

「河泊」（504　古典大系の番号。以下同じ）の紙背に「水神也」、「女湖」（513）に「駅ノ名也」の如くであって、これまた頭註と同筆らしい。

奥書識語なし。

各巻見返しに「禰家蔵書」（朱陽刻印三・〇×三・〇㎝）一顆。巻首、巻中、巻末に「金沢文庫」（墨陽刻印八・七×一・八㎝）都合三顆を捺す。金沢文庫印は、関晃『金沢文庫の研究』に第二類第一号として分類されているものである。

書写年代は鎌倉中期であろうか。書風（特に漢字）には上代様ののびやかさが感じられ、後京極流に代表されるような鎌倉時代的逞勁さに乏しい。したがって掲出本は、平安時代書写の親本（行成筆を伝承されるにふさわしいような）をかなりの忠実さで転写したものとも考えられる。

付属資料として二重桐箱（内箱は蓋裏に見返しと同じ「禰家蔵書」印、箱底に「かうせい筆／和漢朗詠二巻／上巻墨付三十枚上紙壱枚／下巻墨付三十二枚上紙一枚」と墨書し「禰家蔵書」印を捺す）、奥村一洲氏あて関晃書簡一通などがある。

右の「禰家」とは、職原抄上百官に「小槻氏称禰家」と見える官務家小槻宿禰氏の謂である。

なお掲出本は『金沢文庫図録』に奥村一洲氏蔵として書影を載せる。関晃前掲書では、小林一三氏蔵とある。小槻家・金沢文庫から逸翁美術館までの伝来が、興味深くたどられる典籍と言える。

和漢朗詠集　一三二

写本二軸。藍地に鬱金色で波・雲鶴文を織り出した緞子表紙。元来無題簽だが「132和漢朗詠集上（下）」「世尊寺伊房筆」の紙片二葉を貼る。内題は「和漢朗詠集上」「和漢朗詠集巻下」とある。奥書識語の類なし。

紙高三〇・〇cm、表紙幅二五・三cm、本文紙幅は広狭あるも四五cm程度で、上巻四二紙下巻三八紙、都合八一紙。両巻とも礼紙あって水晶八角軸に付く。料紙は雲母を引いた斐紙で、見返しは布目紙に全面金泥、金箔・野毛を蒔く。

天地二五・三cm、幅三・〇cmの淡墨界を施し、また地より三・二cmのところに一線を引く。詩句は界間に一行、和歌は二行に書写する。詩題作者名等は原則として下欄に記す。巻の展開にともなって書風は放恣に流れる。全巻にわたって片仮名による送り仮名・返点（以上墨）、声点（朱）が見られる。片仮名中にまま「子」（ネ）、「マ」（マ）の如き異体あり。

付属資料として「世尊寺中納言伊房／行成孫（下略）」とし、「南天荘」の朱陽刻印を捺した紙片と、「朗詠集全部一冊／世尊寺伊房卿正筆／故了中（ママ）折紙添之」と記した檀紙を「小札極」の表書ある紙に包んだものが存し、一括して杉墨塗箱に入る。現在古筆了仲の折紙は見あたらず、また「全部一冊」の記述と矛盾するので、掲出本とは別の典籍に付属していたものかと思われる。

掲出本は室町時代の写しと考えられるもので、無論藤原伊房（一〇三〇―一〇九六）の手ではない。なお「南天荘」は井上通泰の所用印である。

和漢朗詠集　一三三

写本二軸。青、黄等で唐草を織り出した緞子表紙に「133和漢朗詠集上（下）」「世尊寺行能筆」の紙片を貼る。内題「和漢朗詠集上（下）」、奥書識語等なし。

紙高三〇・九cm、表紙幅三一・一cm。本文紙幅約四五cmで上巻三五紙下巻三八紙、都合七三紙。両巻とも礼紙あって唐木軸に付く。料紙は薄手斐紙、見返しは金地に銀泥霞引き、金銀切箔散らし。

天地二二・三cmの淡墨界を施すのみで、縦界線なし。楷・行をまじえ変化をねらった書写態度で、他本との校合若干を除けば訓点の類は一切なく、詩歌の出典注記・作者名等も省かれている。おそらく書道手本乃至書写上の美意識をねらって作成されたものであろう。

紙質、書風より見て、南北朝―室町時代前半の書写と思われる。藤原行能（一一七九―一二五一？）と鑑定された理由は不明と言う他ない。

付属資料二点。その一は、世尊寺行能真跡たることを証した古筆了佐の書状を「朗詠之付状　壱通」と表書のある紙に包んだもの。もう一つは、明治一一年の古筆了仲の折紙を「副簡」と墨書した紙に包んだものである。これらを一括して古色ある印籠蓋造箱に入れ、さらに桐箱に納む。

和漢朗詠集　一三四

写本二軸。赤朽葉地に梅花・菱等を織り出した緞子表紙に「134冷泉為秀筆／和漢朗詠集上（下）」とした紙片を貼る。内題は「和漢朗詠集上（下）」とある。奥書識語の類なし。

紙高三〇・三cm、表紙幅三五・五cm、本文紙幅約四五cmで、上巻三四紙下巻三九紙、都合七三紙。両巻とも礼紙あって菊紋螺鈿の紫檀軸に付く。料紙斐楮混ぜ漉き、見返しは金銀箔、野毛等で霞を描く。なお本文と見返しとの間に幅一二cmほどの緑色絹布を貼る。原装の一部であろうか。

天地二三・三cm、幅二・九cmの淡墨界を施し、詩歌は界間に一行、和歌は二行に書写し、下巻は上巻より闊達に筆を運んでいる。頭註・傍註・片仮名による送り仮名（以上墨、まれに朱の片仮名あり）、ヲコト点（朱）・声点（朱墨二種）等がかなり詳しく記されていて、特に下巻に多く見られるところである。ただし頭註、傍註に関して言えば上巻と下巻とで異筆であると判断される。他の書き入れについては、にわかには同異を判じがたい。

「了」（ア）、「七」（サ）、「爪」（ス）、「禾」（ワ）等の片仮名の異体も目につくところであるが、「菅本云菅三品云々可勘」（34の作者名に関する註）、「此詩不載江本」（182と183の間に存する詩に対しての註）、「或本無此歌」（434についての註）などにうかがえる菅家江家のテクスト差にかかわる註記や、下巻に特に多い頭註、傍註の内容こそ注目に値するものであろう。今後の課題としたい。

伝承筆者とされる冷泉為秀（一三一二―一三七二）の真跡か否かは不明だが、略々その時代か若干下る頃の書写であろう。

蓋表に金泥で「和漢朗詠集／冷泉為秀卿筆／弐軸」と書いた黒漆塗箱に入り、さらに桐箱に納める。

和漢朗詠集　一三五

写本二軸。金茶地に唐草を織り出した緞子表紙に「135二条為親筆／和漢朗詠集上（下）」の紙片を貼る。内題は「和漢朗詠集上（下）」とある。奥書識語の類なし。

紙高二六・〇cm、表紙幅二五・八cm。本文はかつて幅一七cm程度の折本であったものを巻子に改装、折り目が相当強くついていたため紙の繊維の切れているところもあり、さらに金銀箔を蒔いた間似合紙で総裏打を施してあるので、紙幅を測定しにくい。両巻とも礼紙を介して紫檀軸に付く。料紙斐紙、見返しは金銀切箔・野毛を散らし、金銀泥にて草花を描く。

天地二二・一cm、幅二・八cmの淡墨界を引き、界間に詩句は一行、和歌は二行に書写する。声点（朱）と若干の片仮名書き入れ・校合（共に墨）が見られる。元来全巻にわたって傍訓を墨書してあったらしく、現在それを削り去った跡が歴然としている。また詩題や作者名は原則として下方欄外に記されるが、それらは本文と別筆で、かなり後のわざと思われる。

紙質書風よりして、二条為親（一二九二―一三五一）の時代よりは若干後代のものであろう。

付属資料に、寛文九年の代付と極札とがあり、掲出本と共に桐漆塗箱に納む。

和漢朗詠集　一三六

二巻分の未装訂継紙。内題「和漢朗詠集上（下）」。

紙高二六、八cm、本文紙幅四〇cm程度で、上巻三三紙下巻三八紙、都合七一紙。料紙楮紙。

上下欄外に雲龍のある天地約二四cmの界を緑色で刷りつけ、界幅三・〇cmの縦界線は手書きである。焼絵風に梅、菊等を描いた上に本文を写している。全巻にわたって片仮名による送り仮名・声点（以上墨）、ヲコト点・縦点（以上朱）を施す。

上巻本文は393以下を欠く。書写時期に関しては未詳。

包紙をかけ、浮線綾を金漆で描いた唐木箱に納む。

和漢朗詠集　一三七

下巻のみの零写本一軸。牡丹・鳳凰等を織り出した金茶色緞子表紙に金箔散らしの題簽を押すが、外題は書かれていない。ごく近年のものとおぼしき「137筆者不詳／和漢詠集下巻」の紙片を貼る。内題は「和漢朗詠集下」（巻首）「和漢朗詠抄下」（巻尾）と記される。奥書識語等なし。桐箱入。

紙高二六・三cm、表紙幅二四・五cm、本文紙幅約四四cmで全四〇紙を継ぎ、礼紙あって紫布覆軸（現在布はほとんど落つ）に付く。料紙斐楮混ぜ漉き、見返しは素紙である。

天地二四・六cm、幅三・〇cmの淡墨界を引き、さらに地より三・二cmのところに一線を画す。界間に詩句は一行、和歌は二行に書写し、下欄に詩題作者等を記す。本文は後になるにしたがい奔放をきわめ、一見異筆の如くだが、やはり全巻一手とすべきであろう。

全巻にわたって片仮名による送仮名（墨、本文と同筆らしい）、ヲコト点・返点・縦点（以上朱）が見える。まま料紙磨滅による文字のかすれに入墨した個所、やや後筆と思われる書き入れも存す。

ほぼ四行ごとに折り目あとがあり、古く折本仕立であったものと推される。その後、総裏打を施し巻子本化して現在に至ったものであろう。

紙質・書風より判断して鎌倉時代を下らぬ頃の書写と推せられ、丁寧な朱のヲコト点が美しい典籍ではあるが、下巻のみの零本であること、相当数の誤写の存することは実に惜しむべき瑕瑾である。誤脱と思われる例を示せば、「しなかりそ」（440「しかなかりそ」の「か」脱）、「篇中」（468「簾中」の誤）、「羅維」（494「羅帷」の誤）、「世家」（583「世界」の誤）となる。

古今和歌集　写　二冊　一三八

伝為家筆。表紙左上に「古今和歌集上（下）」と記した後補の題簽を

貼る。内題はなし。一八・三×一六・四㎝。列帖装。本文料紙は楮混じりの鳥の子。見返しは金銀箔散らし。紙数は、上冊、遊紙、首一丁、尾二丁、本文墨付一三三丁。下冊、遊紙、首一丁、尾三丁、本文墨付一四二丁。一面九行、和歌二行。詞書二字下げ。巻頭に真名序を置き、以下、仮名序、本文の順で、巻一～一〇を上冊、巻一一～二〇を下冊に書く。鎌倉後期写。

上巻奥に、底本、校合本について記した識語を持つ。下巻末の極書には、

這古今和歌集上下全部
貳冊共為家卿真筆無
紛者也或人依所望ニ證之
而已　　藤谷中納言
仲冬上旬　　為條（花押）

とある。二重の箱入。箱書にも、

古今和歌集上下　二冊
為家卿筆　　（外箱）
古今集上下二冊為家卿筆　（内箱）

と記す。本文と同筆の墨書入を持つ。

古今和歌集　　写　一冊　一三九

伝下冷泉持為筆。外来の布地と思われる表紙（後補）の左上に題簽を貼り、「古今倭謌集」と記す。内題（巻一端作り）は「古今和謌集」。二四・二×一六・三㎝。列帖装。本文料紙は楮紙のようであるが不明。見返しは金紙箔を押す。紙数は、遊紙、首一丁、尾二丁、本文墨付一七七丁。一面九行、和歌一行、詞書四字下げ。巻頭に仮名序、巻末に真名序を持つ。室町写。箱入。

巻末に、

此集家々所稱雖説々多且任師説又加
了見為備後學之證本不顧老眼之不堪
手自書之
近化僻案之好士以書生之失錯稱有識
之秘事可謂道之魔姓不可用之如此用
捨且可随其身之所好不可存自他之差別
志同者可之（マヽ）

の、定家貞応二年本の奥書を持つが、貞応二年の年紀と定家の署名とを欠く。極札には、

下冷泉殿　元但持為四古今和歌集於外題近衛信尹公御筆

とあり、また、箱書にも、

下冷泉持為卿筆
古今和歌集　全部
近衛殿信尹公外題

とある。

古今和歌集　　写　一冊　一四〇

伝堯憲筆。鳥の子紫地に金泥乱線模様を描いた表紙の左上に、元来はあった題簽が剝離し、その跡に「古今和哥集」と外題を打付書きする。内題はなし。二五・〇×一六・八㎝。列帖装。本文料紙鳥の子。見返しは金銀継紙の草花文様押型。紙数、遊紙首尾各一丁、本文墨付一七五丁。一面九行、和歌一行、詞書二字下げ。巻頭に仮名序、巻末に真名序を持つ。室町期写。

巻末には、先ず定家貞応二年本の奥書があり、次に、

此集加校合令一覧
者也
延徳三年二月十八日
法印堯（花押）

とある。さらに、堯憲の真跡であることを証する「古書了佐」の次の極書を持つ。

右古今集全部者
和哥所法印堯孝門弟法印堯憲前廉之筆跡
無紛之奥書在判其弓(?)俊之手跡也重而加
書者歟最家珍々
承應元暦
小春下旬　古筆
了佐（花押）

風雅和歌集　写　二軸　一四一

伝頓阿筆。表紙は後補の緑地金糸唐草模様。外題はなし。内題（巻十七端作り）は「風雅和歌集第十七」。巻十七・雑哥下のみの零本であるが、二軸に分写したもの。見返しは金箔散らし、金泥で山水模様を描く。二七・六×一二六・〇㎝（第一軸）。二七・六×一二一・〇㎝（第二軸）。巻子。料紙は鳥の子。和歌二行、詞書二字下げ。箱入。

極札の包紙表に、

正四位下阿波守季鷹　定

とあり、極札は、

頓阿法師真蹟／風雅集雑部二巻／是は先年も乞一覧候き／誠ニ不渉推論一段／見事之真蹟と存し／候秘蔵可被成候／季鷹
せき入て／千歳も成よや／言の葉の／みちにもあふく／水茎の跡

とある。

二八明題集　写　六冊　一四二

茶地金糸花鳥雲形緞子表紙。外題「二八明題集春（夏…雑）」。見返しは鳥の子に金銀切箔、金銀泥の雲形模様。内題は「二八明題集」。二二・八×一六・一㎝。本文料紙は鳥の子、雲母引き。本文墨付、春（一〇〇丁）、夏（二五丁）、秋（六〇丁）、冬（六七丁）、恋（一一九丁）、雑（五六丁）。

極札（牡丹花二八明題和歌集全部 山琴）、了仲の極書に「後柏原天皇勅外題宸翰／牡丹花肖柏自筆／二八明題集全部真跡也」とする。また別に、明治四年初秋の寂樵による添え書あり。

歌仙・新歌仙・二十一代集巻頭歌　　写　一冊　一四四

藍色絹地鳳凰織文様の表紙で、外題なし。内題（端作り）は「三十六人歌合」、「新三十六人歌合」、「二十一代集巻頭歌」とある。二三・八×一七・二cm。見返しは本文共紙。本文料紙鳥の子。列帖装。本文墨付一七丁（三十六人歌合＝六丁、新三十六人歌合＝六丁、二十一代集巻頭歌＝五丁）、遊紙は尾三丁のみ。一面一〇行、和歌二行、詞書一字下げ。室町末期写か。

表紙見返しに極書を貼付し、それには、

近衛殿龍山真蹟哥仙新哥仙并廿（以下破損）

と記される。別に極札一通があり、

東求院太政大臣前久公 印　（表）

歌仙新歌仙二十一代集巻頭歌 印（裏）

とある。

三十六歌仙歌合色紙帖　　写　一帖　一四五

雷文紫絹地に金糸唐草文様を描いた表紙の中央に題簽を貼り、「三十六人歌合」と外題を書く。内題はなし。もと一枚一九・七×一七・四cmの色紙であったものを折本仕立てにしたもの。見返しは布目金糸。表に、人磨、貫之以下三十六歌仙の歌各一首を左右に番えた三十六首、裏に、作者を記さぬ歌三十六首を書き、計七十二首。表は作者一行、歌四行に書き、作者を記さぬ裏は歌を散書にする。箱入。極書が添えられ、その上書に、

哥仙色紙

公家衆三十六人書

御筆者極古筆了音折紙

とあり、折紙には「歌仙御筆者目録」として、鷹司房輔、近衛基凞以下公家衆三十六人の筆者が掲げられる。その末尾に、

右之通銘々御真蹟／無疑者也仍證之畢／古筆了音 印／元禄十四年九月日

と極められている。これに従えば、延宝、貞享頃の写と思われる。なお、別に添えられた識語によって、もと信州上田松平家旧蔵であったことが知られる。

三十六歌仙短冊帖　　写　一帖　一四六

一面に、四〇・〇×一〇・三cmの短冊二枚ずつを貼り合わせて、折本に仕立てたもの。計一八面、三六枚。外題、内題ともになし。各短冊の下方に、狩野元休（寛文～元禄頃の人）の筆になる歌仙絵が描かれ、数人による筆で和歌が書かれる。

内容は、左後鳥羽院、右式子内親王から始まる新歌仙の歌一首ずつを、歌合形式に番えたもの。元禄頃写。別紙が添えられ、

狩野元休

元佐と称する画法を松栄及び休日に学びて能くせり寛文より元禄頃の人なり

と、筆者元休についての注記が記される。

三十六歌仙　　写　一冊　一四七

尾形乾山筆。唐草文様を描いた臘箋表紙の左端に「三十六人歌仙」と外題を書いた題簽を貼る。内題（端作り）は「三十六人哥仙」。一八・五×二五・六cm。袋綴。料紙は楮と鳥の子の混ぜ漉きか。見返しは本文共紙。遊紙はなく、墨付九丁。但し九ウは白紙。一面八行、歌三行書き。初めに人麿、躬恒以下左方歌人の歌一八首を掲げ、続いて貫之、伊勢以下右方歌人の歌を書く。箱入。

奥書は、

元文丁巳初冬

於野州佐埜庄須藤杜川丈人

應望

紫翠深省写

印　印

と記される。極札が添えられ、

本六半形紙拾枚墨附奥書有名印癸未八㊞（表）

乾山深省三十六哥仙たつた川一冊全部　印　（裏）

とある。江戸中期写。

佐竹本歌仙絵模写　　写　二軸　一四八

綿織更紗文様の表紙の左上に、「六々歌仙伯甘亞上（下）」と外題を書いた題簽を貼る。見返しは鳥の子金箔散らし。三六・〇×一二四三・〇cm（第一軸）、三六・〇×一〇九四・〇cm（第二軸）。巻子。薄様楮の料紙に裏付補修を施す。彩色絵入り。

奥書は、

文久二壬戌年九月

孝恭写之　（第一軸）

文久三癸亥年十二月上旬

孝恭写之　（第二軸）

とある。文久二年、三年の写。

女房三十六歌仙歌巻　　写　一軸　一四九

淡茶絹地紺糸菊花織文の表紙に外題はなく、内題（端作り）は「女房三十六人哥仙」とある。見返しは布目金泥雲形文様。二四・五×七六八・〇cm。巻子。雲紙の装飾紙の鳥の子料紙に、金泥草花の竜文下紙を施す。巻頭は「左　小野小町」、「右　式子内親王」から始まり、左右各一首ずつを番える。箱入。

極札が添えられるが、それに、

渡辺素平女房三十六哥仙左おもひつゝ印　（表）

巻物壬辰二㊞　（裏）

と記され、江戸中期、渡辺素平なる者の写と伝わる。

女房三十六歌仙絵巻　　写　一軸　　一五〇

表紙は傷みが激しいが、鳥の子紙の、桜花散らし下文様の跡が見られる。外題はなく、内題（端作り）は「女房三十六哥合」。二五・九×四七六・〇㎝。見返しは金銀箔散らし。巻子。本文料紙は水草文様の下絵を施した鳥の子。彩色絵入り。巻頭は「左　小野小町」、「右　式子内親王」から始まる。

奥書は、

右一巻者依或人懇望
以愚筆書写〻

五月日　　源資晴

とあり、表紙見返しに貼付された極札にも、

佐々木殿資晴　了阿 印

一位局絵

と記される。江戸中期の写。

百人一首　　一五一

写本一冊。列帖。表紙は茶絹地金糸瓢箪織文、縦一七・七×横一二・八糎。外題は題簽左肩「百人一首」。内題「百人一首」。見返しは金紙に緑や赤の秋草文様。料紙は鳥の子。尊朝法親王筆。墨付二十七丁。一面七行。和歌一首二行書。箱蓋表に直書にて「百人一首　畠山牛庵極　青蓮院殿尊朝法親王筆」とあり、箱蓋裏に貼紙して「尊朝　百年之余／公方義昭公ノ時分／正親町院ノ御代／此書付畠山牛庵筆」とあり、同じく付箋して「正親町院御宇従永禄元戊午年元禄五壬申年迄百三拾五年／天和貳年戊十二月十六日求之」とある。また最終丁に貼紙して、「百人一首／青蓮院殿尊朝法親王　牛庵」とある。

三日会の事　　写　一軸　　一五二

浅葱色絹無地の表紙に白無地紙金切箔の題簽を貼るが、この題簽には文字書入れなし。内題（端作り）は「三日会事」。二八・三×一五八・〇㎝。巻子。鳥の子の料紙に金泥の草花模様の下絵を施す。見返しは桃色紙地に唐草模様入り。

添状一通があり、それには、「昭和十五年庚辰一月三日小伊(?)園主人拝識印」の署名入りで、「尊純法親王御真蹟」と記し、尊純法親王の略伝と、釈文とを記す。伝尊純法親王筆、江戸初期写。

百首歌合　　一五三

写本五冊　列帖　外題は題簽左に第一冊「百首謌合第一（建長八九十三春秋／九条前内府家）愚判」、第二冊「百首謌合第二（建長八九十三春秋／九条前内府家）入道三品判」、第三冊「百首謌合第三（建長八九十三夏冬／九条前内府家）左京大夫判」、第四冊「百首謌合第四（建長八九十三夏冬／九条前内府家）真観判」、第五冊百首謌合第五（建長八九十三恋雑／九条前内府家）愚判」とある。扉に「姉小路基綱卿筆／百首歌合」とあり。目録題は「百首歌合（建長八年九月十三日）」とある。表紙は薄茶色紙に紫の墨流し、縦二六・〇×横一六・八糎。料紙は鳥の子。見返は本文料紙に同じ。墨付は第一冊七〇丁、第二冊七九丁、第三冊

八二丁、第四冊四九丁、第五冊三五丁。一面一〇行書。和歌一首一行書。目録に

百首歌合 建長八年九月十三日

題

春二十首　夏十五首

秋二十首　冬十五首

恋十五首　雑十五首

作者

前内大臣 基家　衣笠前内大臣

入道大納伊平　権大納言良教

権中納言顕朝　正二位忠定

右近中将経家　右近中将忠基

左京大夫行家　法印実伊

左近中将伊長　右近中将伊嗣

右近中将具氏　沙弥寂西

沙弥真観

土御門院小宰相　院中納言

鷹司院帥　前摂政家民部卿

判者

愚老　第一 春秋

入道正三位知家　第二 春秋

左京大夫行家　第三 夏冬

真観　第四 夏冬

愚老　第五 恋雑

とある。奥に「抑百首歌合者広訪明君明士之佳会／即是建久建仁之両度也爰小臣独留父／祖之跡恨泥和漢之道者以智水浅而魚無／漁会徒柮一諸之浪哥山廃而花嬾龍林／未研八雲之林故雖恥衆人之嘲猶似追／累家之例但建久左幕之招二六翌風雅／於六百番之篇建長下愚之命十九人／分露詞於九百番之判縦叶希代之勝躅／争模遺老之閑遊此中恣披両三之巻軸／雖記古今之是非依恐雀羽之短性不載／鳳毛之群才随所書不尽言々不尽心之故也」とある。「百首詞合姉小路殿基綱卿御筆 五冊共外題同」琴山」の極めがあり、極の包紙に「姉小路基調卿百首詞合極 古筆了佐外題共同卿筆」とある。また、第一冊に「姉小路基綱卿筆百首歌合」の挟紙がある。内容は建長八年九月十三夜に、前内大臣藤原基家の家で催された歌合せで、目録にあるとおり、基家以下計十九人がそれぞれ百首を詠んで合せた九五十番歌合であるが、六六六～八五五番までが欠けている。なお宮内庁書陵部に一本伝存し、「未刊国文資料」に集録されているが、書陵部本は三百八十番までしかない。古筆了佐の極により、本書の筆者とされる姉小路基綱は永正元（一五〇四）年六四歳で卒しており、基綱筆とすれば、おおよその書写年を知り得る。

写本一冊、列帖。外題はなく、内題は「哥合」とある。表紙は淡黄絹地に金泥牡丹唐草文様、縦二五・三×横一七・一糎。見返しは白絹地織文様。料紙は鳥の子。墨付三六丁。一面一〇行書。和歌一首一行書。箱書、表に「百番歌合　飛鳥井雅俊卿筆」とあり、裏に「飛鳥井入道前亜相公雅康卿染筆百番歌合／一冊購得之干洞津書舗停雲舎以真贋／難決講今之飛鳥井尊師前亜相公雅光卿鑑定／之処真蹟無疑之由筆于巻末別添一書／返賜依之比一冊得全美永可為家珍焉　天保十一年康子十一月　門末　春木煥光」とあり、奥に「比歌合者如奥書依大樹義政公之厳命／入道前中納言宋世雅康俗名所被執筆之書也／但於此一冊者入道前大納言栄雅雅親俗名之執筆無／疑者也今度煥光朝臣依懇望記之畢　于時天保十一年仲冬初七日　前権亜相雅光」とある。さらに、元表紙の題簽かと思はれる剝落した一紙が挿入されており、それには「飛鳥井殿カ雅□俊カ百番哥合」「百番哥合」とあり、さらに小紙一紙に「入道前大納言栄雅筆」とある。内容は、

原上霞

一番

左　　前関白（二條持通）

霜かれのお花か末の春風に霞なみよるむさし野の原

右　　関白（近衛政家）

いつまてか在とはみえしその原や春は霞にきゆるはゝきゝ

に始まる、一〇題、二〇人による百番歌合せ。題者は飛鳥井雅康（栄世）、判者は飛鳥井雅親（栄雅）。文明十四年六月十日に足利義尚が催した百番歌合で、同年七月十八日に栄雅が判及び判歌を付して幕府に進上した、いわゆる将軍家歌合である。本書の書写者は奥書や箱の蓋裏書によれば、判者である栄雅であるという。

〈参考〉

『図書寮典籍解題続文学篇』　『群書類従第十三輯』　『群書解題第八』

秋篠月清集　　写　一冊　　一五五

二重格子布地表紙、見返しは金銀切箔、銀野毛、銀泥による雲形模様。外題なし。一八・二×一三・三㎝、料紙は鳥の子、一面一〇行書き、前後各一丁の遊紙、墨付六五丁。

箱蓋に「花月百首下冷泉為孝筆」とし、本文遊紙表にも、「下冷泉殿為孝卿花月百首一冊琴山」「花月百首下冷泉殿為孝卿（印）」の二枚の極札が貼付される。一丁表の内容目次に、「花月百首」以下「同句題五十首」までを収め、「已上千首」とする。内容は「秋篠月清集」の巻一、巻二。

伊勢物語　　写　一冊　　一五六

朽葉色地に青、金糸による唐草模様緞子。外題なし。見返しは、金紙地の布目。一八・九×一四・二㎝。本文料紙鳥の子、雲母引き、列帖装。前後各一丁の遊紙、本文墨付九五丁。巻末に「抑伊勢物語根源云々」以下の識語あり。箱蓋に「冷泉殿為頼卿御筆／伊勢物語」とあ

り、前遊紙表に「上冷泉殿為頼卿（伊勢物語一冊むかしおとこ）（印）」と川勝宗久の極札貼付。

詠十首和歌巻（近衛家久 法橋救竹）　写　二軸　一五七

深緑色緞子の表紙に金紙の題簽を貼り、「関白家久公御筆」、「法橋兼竹筆」と記す。内題（端作り）はそれぞれ、「詠十首和歌　家久上」、「詠十首和歌　法橋兼竹」。二六・二×一七四・〇㎝（家久）、二一・四×一六三・〇㎝（兼竹）。和歌三行、詞書一字下げ。見返しは金銀切箔散らし、朝霞、夕鶯、夜梅、柳露、花盛、待恋、逢恋、帰恋、閨鶏、神祇の十題に各一首ずつ、計二〇首。

箱入。箱書は、

詠草（法橋救竹）　一軸

（如是観院准后関白家久公）

御和答　一軸

とあり、極札には、

裏（？）之通相違無之候

と記される。

この二軸は同じ箱に収納されており、天地と長さが異なるほかは同体裁であるところから、同題で同時に詠歌したものと考えられる。

春夢草　写　一冊　一五八

梨地金襴の織模様表紙。左肩に「春夢草　全」の題簽。見返しは金地に金泥による小松絵模様。一九・三×一四・二㎝、本文料紙鳥の子。列帖装。前後各一丁の遊紙、本文墨付三七丁。一面一〇行書き。

巻末に「永正十二年夏之間録之／夢庵居士（在判）」「右一冊以楊明御本片時之間ニ／令書写遂一校早可為證本者也／于時弘治三年三月日（細河兵部大輔）藤孝（花押）」とする。また、「細川玄旨法印（春夢草一冊）琴山」の極札、「春夢草一冊／細川玄旨法印芳／筆不渉異論者也／（正徳二辰暦）林鐘下旬　古筆了仲」の添え状あり。発句部のみで、京都大学図書館蔵肖柏自筆本の幽斎による転写か。

玄旨和歌短冊帖　一五九

折本一帖。表紙は花模様等織出しの緞子、縦四〇・七×横二〇・五糎。外題はなく、中央に題簽のみ貼り付けてある。見返しは金切箔散し、内題なし。

松残雪　吹はらふあかしのいかにうつもれて
はるまてのこる松のしら雪　玄旨

から

遠方　都にとことえりしつゝかくふみに

書信　とゝこほりぬる筆のあとかな

まで和歌短冊二四枚を貼ったもの。全短冊に「玄旨」の署名があり、細川幽斎の自歌自筆の短冊帖である。箱蓋表中央上に直書にて「玄旨公短冊帖」とあり、箱蓋裏中央下に「裔孫細川護立敬書」とある。

恵慶集　　写　一冊　一六〇

金茶地草花模様布表紙。外題「恵慶集」の題簽が表紙中央にあり、見返しは金紙。一六・五×一八・〇㎝。本文料紙鳥の子、列帖装。前一、後六丁の遊紙、本文墨付二一丁。一面九行、一首二行書き。

箱蓋横に「恵慶集　小堀遠州筆」とする紙片貼付。箱の中には「一〇一　遠州恵慶集、金弐百参拾九円也、平山堂」の値札あり。定家本の臨模で、同じ臨模の書陵部本と行数等すべて一致する。歌数は、初句しか残されていないのを含めて一〇二首。流布本系統に位置する。

源氏狭衣歌合　　写折本一帖　一六一

紺地に金銀糸による鳥・獣と卍繋ぎ文様の緞子表紙。外題なし。見返しは金色地に布目模様。内題は「源氏／狭衣／百番哥合」とする。二五・二×一〇・六㎝。本文料紙は色変りの鳥の子。本文墨付九二丁、遊紙なし。箱蓋に「松浦肥前守鎮信筆　源氏狭衣歌合」と打付書、蓋裏に「源氏狭衣歌合帖　松浦鎮信公御筆」の紙片貼付。

詞書、歌を散し書き風に書写する。七十三番の左右の歌二首を欠く。なお、裏見返しの金泥が巻末の紙面を汚し、一部判読不能の部分がある。

貫之長歌　　写　一帖　一六三

伝松平治郷筆。茶色羅の表紙に唐草模様入りの茶色地紙の題簽を貼り、「貫之朝臣長哥（不味公）」と書く。内題はなし。三四・四×四六八・〇㎝。折本。見返しは本文共紙。料紙は鳥の子。

箱入。箱書にも「不味公筆貫之朝臣長歌」とある。江戸後期写。

内容は、古今集巻一九の、

くれ竹のよゝのふることなかりせは……

の忠岑の長歌（国歌大観番号一〇〇八）を書いたものであるが、これに続けて末尾に、

ふるうたたてまつりし時のもくろくのそのなかうた　つらゆき

とある。これは古今集の忠岑長歌の前にある貫之長歌の詞書と作者名であり、何らかの錯誤を生じたために続けて書かれたのであろうが、これによって貫之歌に誤認されたものと思われる。

詩歌巻　　写　一軸　一六三

松花堂昭乗筆。薄藍色地に銀糸の飛鼠と飛龍図入りの表紙。外題はなく、内題（端作り）には「月下独酌」と記す。天地二八・二㎝。巻子。料紙は羅で裏は雲母引紙。見返しは鳥の子紙に竹の墨絵入り。

奥書は、

寛永丁丑初／秋仲（アキ）日依／人之所望巻／南山傅法比丘昭乗

とある。寛永一四年写。極札には、

覧

一松花堂筆

五筆詠一巻絹地奥書朱印貳　　袖内々竹兼印壱有

哥　一巻同　奥書書判あり

己上

とある。内容は、「月下独酌」（李太白）、「勧酒惜別」（張乖崖）の漢詩文の抜書。

詩歌巻　　写　一軸　一六三

松花堂昭乗筆。表紙は浅葱色裂地に金糸の波千鳥模様を描き、後補の題簽「松花堂筆詩五の巻二の内俊成外哥十八首」を貼る。内題はなし。天地二八・四㎝。巻子。料紙は羅で裏は雲母引紙。見返しは紙地に金銀泥、切箔による水辺模様を描く。和歌四行書き。

奥書には、

南山沙門昭乗

依所望書之（花押）

とある。内容は、俊成、西行、定家ほか著名歌人の歌を各一首ずつ全十八首書いたもの。

竹取物語絵巻（奈良絵本）　巻子本三軸　一〇四九

金襴緞子に菊唐草文様の表紙に、「竹とり物語上」「たけとり物語中（下）」の題簽。見返しは金箔。天地三三・五㎝、上巻一〇m一〇㎝・中巻一一m・下巻九m六三㎝。江戸初期写。

源氏物語絵巻　　巻子本一軸　一〇五七

紺地山水草花文様の表紙に「はしひめ　しゐかもと　あけまき／さわらひ　やとり木」の題簽貼付。見返しは水辺草花を描く。天地は三三・〇㎝。鳥の子の料紙には鳥・草木等の下絵がほどされている。本文は抄出、絵は白描。本文には錯簡が見られる。

田中一松氏による、次のような別紙識語が付される。「文正双紙と同じく元禄頃の作か、これは写しと言ふべきではなく一種の創作である。文正草子に類して土佐の風が多い、詞はやゝ光悦風あり、当時流行した為であらう、十三年十月」

伊勢物語（奈良絵本）　　写二冊　一〇八五

紺地に金切箔と金泥による花花模様表紙。左肩に「伊勢物かたり　上（下）」の題簽。見返しは金紙地に布目。二三・六×一七・〇㎝。本文料紙は鳥の子、列帖装。上冊は前一丁、後四丁の遊紙、墨付四九丁。下冊は前一丁、後三丁の遊紙、墨付六三丁。一面一〇行及び散し書きあり。彩色絵入り。巻末に識語なし。

伊勢物語（奈良絵本）　　写二冊　一〇八六

緑地金糸菊花牡丹唐草緞子。表紙中央に「伊勢物語　上（下）」の題簽。見返しは雷文繋ぎに菱紋と雲母砂子散しの貼合せ。二四・一×一七・八㎝。本文料紙鳥の子、列帖装。上冊は本文墨付四九丁、下冊は

前後に各一丁の遊紙、墨付六一丁。一面一〇行及び散し書きあり。彩色絵入り。巻末には「伊勢物語新刊世酷多矣然京極黄門一本之奥書云」以下の識語あり。

狭衣下紐　　写四冊　一〇八七

紺地に金切箔散し金泥草花模様。外題「下紐春（〜冬）」の題簽を表紙左肩に貼付。見返しは金紙布目。二四・五×一八・〇cm。本文料紙鳥の子、列帖装。春―前一丁遊紙、墨付六八丁、夏―前一丁遊紙、墨付三一丁、秋―前一丁遊紙、墨付三三丁、冬―前後各一丁の遊紙、墨付二一丁。一面九行書き。

狭衣物語　　写四冊　一〇八七

紺地金泥で梅・撫子等草花模様。外題「狭衣春（〜冬）」の題簽。見返しは金紙布目。二四・六×一八・五cm。本文料紙は鳥の子、列帖装。春―前二丁、後一丁の遊紙、墨付一四一丁、夏―前後各一丁の遊紙、墨付一二八丁、秋―前一丁、後二丁の遊紙、墨付二〇二丁、冬―前一丁の遊紙、墨付二五二丁。本文料紙には、すべてに草木・山水扇等の下紙あり。一面九行書き。

徒然草（奈良絵本）　　写二冊　一〇八九

黄地金糸波紋木葉模様。表紙中央に「宇喜世ものかたり　上」「うき世ものかたり　下」の題簽。見返しは金紙地布目。二二・三×一六・六cm。本文料紙鳥の子、列帖装。上冊は前一丁の遊紙、本文墨付七四丁、下冊は前後各一丁の遊紙、墨付六〇丁。一面一〇行及び散し書きあり。彩色絵入。外題は「うき世ものがたり」とするが、内容は徒然草で、八十三段の途中から最終段までを収める。

落窪物語（奈良絵本）　　写三冊　一〇九〇

紺地に銀泥で松・梅・桜・笹等模様表紙。中央に「おちくぼ（上・中・下）」の題簽。見返しは金地菊花菱繋ぎ紋。三一・二×二四・〇cm。本文料紙は鳥の子、袋綴本。上冊、下冊は前後各一丁の遊紙、墨付一四丁、中冊は前一丁の遊紙、墨付一三丁。一面行数一二行。彩色絵入り。

ふしみときは（奈良絵本）　写二冊　一〇九一

紺地菱花紋表紙。左肩に「ふしみときは　上（下）」の題簽。見返しは本文共紙。本文料紙は鳥の子、袋綴本。三二・五×二三・九cm。本文墨付上冊一七丁、下冊一八丁。一面一一行書き。彩色絵入り。幸若舞曲。

源氏物語詠和歌短冊貼交屏風　一双　一一九六

上田秋成詠による源氏物語五十四帖の巻名歌の短冊を、貼り交ぜにした屏風。「桐壺　よひのまにはかなの月は入にけりねためる雲をかけしなからに」以下「夢浮橋　在てなき世の常をしもわたらへは無きか有てふいめのうきはし　餘斎」とする五十四枚。自筆短冊か。『藤筮冊

子』巻二所収歌と、語句に一部違いが見られる。

谷水帖（古筆手鑑）　一帖

益田鈍翁が、所蔵の古筆切二十四葉を田中親美翁に委嘱して仕立てた手鑑。「谷水」の銘は鈍翁自らの命名で、その出典は箱蓋裏に打付書きされた「吹かせとたにの水としなかりせはみやまかくれのはなを見ましや」（古今集巻二春下）の貫之詠による。以下、切の目録だけ記しておく。

1 高野切第三種（伝貫之筆、古今集巻十八雑下九四〇―九四二）
2 本阿弥切（伝小野道風筆、古今集巻十一恋一、五〇四―五〇七）
3 小島切（伝道風筆、斎宮女御集Ⅳ三四・三五）
4 筋切（伝佐理筆、古今集巻十九雑体一〇六六・一〇六七）
5 通切（伝佐理筆、古今集巻十八雑下九六四、九六五）
6 紙撚切（伝佐理筆、道済集二五九―二六一）
7 香紙切（伝小大君筆、麗花集三六・三七）
8 針切（伝行成筆、重之の子の僧の集一七―一九）
9 和泉式部集切（伝行成筆、和泉式部集Ⅱ一〇一・不明）
10 朗詠集切（伝公任筆、和漢朗詠集巻上秋二三三―二三七・二二八・二二九）
11 金沢万葉集切（伝公任筆、万葉集巻四、五九五―五九七）
12 石山切（伝定信筆、貫之集Ⅰ六〇三―六〇六）
13 石山切（伝公任筆、伊勢集Ⅰ一九八―二〇〇）
14 石山切（同、伊勢集Ⅰ二五九―二六二）
15 石山切（同、伊勢集Ⅰ三一四―三一六）
16 鳥丸切（伝定頼筆、後撰集巻五秋上、二六七―二六九）
17 鳥丸切（同、後撰集巻九恋一、五一六・五一七）
18 古今集切（伝俊頼筆、巻十六哀傷八三六）
19 多賀切（伝基俊筆、和漢朗詠集巻下山家五五九―五六二）
20 平等院切（伝頼政筆、和漢朗詠集巻下将軍、刺史六八八―六九三）
21 日野切（伝俊成筆、千載集巻十四恋四、八七一―八七三）
22 白河切（伝西行筆、後撰集巻八冬四九三―四九六）
23 中院切（伝実朝筆、後拾遺集巻十哀傷五七〇・五七一）
24 有栖川切（伝宗尊親王筆、元暦校本万葉集巻四相聞七六二・七六三）

絵巻、奈良絵本類、書誌略解題

○ 見出し書名は、便宜上所蔵者逸翁美術館の通称を用い、整理番号を併せ掲げた。書名が外・内題等によらない場合は〔　〕を施して示した。

○ 説明は、ほぼ、体裁、巻冊数、装幀、料紙、寸法、段数、挿絵等の順を追い、奥書、識語等を補記し、備考として、系統、伝来、内容、書写時期等について、現段階で註記しうるものを加えた。

○ 本解題は、国文学資料館の調査カードを参考にした。

〔大江山絵巻〕　一〇四一―一

絵巻　二軸。有缺。表紙、雲形と丸に草花小紋を織り出した金地絹表紙。緑色紐。見返し金箔散らし。本文料紙、鳥の子。一紙多く四八ないし五〇糎。題簽・内題なし。寸法、縦三五・三糎、上巻全一四米八九糎、下巻全一三米二五糎（但し、修補時添付の白紙部を除く。現状実寸は別掲）。上巻、詞書五段絵一〇段、下巻、詞書六段絵九段。本文に朱筆校合書入れあり。箱書（内箱蓋裏）「絵　／詞　吉田兼好書／香取家旧蔵／伯爵松浦家蔵」。

本絵巻は、大江山系酒顚童子絵巻の最古のものとされる。別に次掲の吉田兼好筆の極書ある詞書一巻が添えられているが、それとは筆致を異にし、かつ何れも筆者の確証はない。本書には挿絵と対応せしめて、巻頭他に約一〇ケ所近く詞書の脱文が推定され、別添の詞書一巻によってその一部を補いうるが、流布の物語とも異っている。絵は構図・彩色に土佐絵風の特色があり、南北朝期の作風といわれている。もと香取神宮香取氏、松浦伯爵家の蔵、重文。次掲、大江山絵巻詞書参照。

（参考）補修後実寸。上巻、第一図一七一糎。第一詞四九糎。（白紙四九糎）。第二図二五九糎。（白紙五〇糎）。第三図七五糎。（白紙五一糎）。第四図一〇〇糎。（白紙五〇糎）。第五図七四糎。第二詞五〇糎。（白紙五〇糎）。第六図一二五糎。（白紙五〇糎）。第七図五〇糎。第三詞一〇〇糎。第八図五〇糎。第四詞九三糎。第九図一〇〇糎。第五詞一四三糎。第一〇図五〇糎。（白紙八五糎）。全長一八米七四糎。下巻、（白紙四九糎）。第一詞二四糎。第一図七〇糎。第二詞四八糎。第二図七九糎。第三詞四八糎。第三図七四糎。第四詞八五糎。第四図一二三糎。第五詞七四糎。第五図一〇〇糎。第六図五〇糎。（白紙五〇糎）。第六詞一〇〇糎。第七図一五〇糎。第八図一五〇糎。第九図一五〇糎。（白紙八七糎）。全長一五米一一糎。

〔大江山絵巻詞書〕　一〇四一―二

巻子本　一軸。残缺。表紙（後補）絹地、牡丹花紋様。見返し、金箔散らし。本文料紙、鳥の子。原寸天地三〇・一糎、長さ約三米八七糎（九紙）の料紙を、裏打ち修補、巻末に識語等を加えて、現状天地寸法三三・五糎に装幀。後補題簽に「兼好法師真跡小舟岳題簽印」とあり。内題なし。本文詞書三段、一詞一七九・五糎。二詞一二四・三糎。三詞八三糎。巻末に、黒川真頼、小舟岳観の識語（別掲）を

加える。極書・表紙「兼好手蹟　古筆了伴極メ」、短冊「大江山巻物吉田兼好正筆」。別に「吉田兼好大江山巻物詞書　極」と表書し、短冊、表「兼好法師 四人の客人 山琴」裏「大江山巻物詞書九枚継　廿丁亥　二印」とする了悦の極書を加える。室町時代中期写。もと香取神宮香取氏旧蔵、八木善助氏・木山豊實氏蔵を経て、旧状の如く前掲「大江山絵巻」（重文）に添付されることとなったもの。

（参考）　識語

「酒顚童子の絵詞は世にいとおほかる中／におのれか見たるは香取の社の大宮司家／につたふると狩野元信かゑかけりといふなる／ものとの二種そあるか中にめてたくは／おほへたるさてそれかなかにことに／ふるくおほゆるは香取の大宮司家に傳ふる／なりけり巻の数は二巻にて絵も詞かきも／世のつねならねとたれやの人のものせり／ともしるしたらねはしるへきよしなしある／人いへらく詞書の筆者は兼好法師なる／へしとさはいへとこれはたゝしかにはきはめかた／しそはとまれかくまれこの絵詞のた／くひのあまたあるか中にはすくれてめて／たきものなるにところ〳〵ちりうせたるは／あかぬことにおもへりしを今年明治／廿年の三月はかりにはからすもそのちり／うせたりしかたはしを見るこそいとも〳〵／めつらかにはおほゆれこれをかれに／あはせてまたきものと成なましかはこと／にめてたからましたよりあらはよみあ／はせてかうかへて見まほしうなん／黒川真頼しるす」

「此巻前香取祠官大中臣氏所蔵今／歸佐原八木氏家聞香取社大宮司酋／蔵有大江山畫巻叙言則卜部兼好所／書但零断不完鑒賞家惜之今観之／亦其序言之零断也不知何時而割為／二也巻末一條亦是零断蓋似非大／江山叙言不知亦何故而接續之也／丁亥春分節　小舟岳観　印」

（以下略）

大江山絵巻　一〇四二

絵巻　三軸。表紙、萌黄色、無地鳥の子。見返し、金泥唐草紋様。本文料紙、楮紙。題簽、左肩金泥短冊、「大江山　上巻（中巻、下巻）」。内題なし。寸法、縦三八・四糎。上巻全一八米五〇糎、中巻二四米九〇糎、下巻全二四米五〇糎。各巻とも巻末に奥書「絵　狩野探幽藤原守信図之 落款」がある。挿絵には狩野派らしい特徴が著しいが、江戸中期の写か。各巻構成後掲。本絵巻は伊吹山系の酒顚童子絵巻で、岩瀬文庫蔵絵巻などと同系かと見られる。但し下巻に錯簡が一ケ所あり、巻末詞書一段に異同がある。

上巻、詞書八段絵八段。一詞二三〇糎。一図八八糎。二詞一三二糎、二図一七九糎。三詞三九糎、三図二七三糎。四詞四〇糎、四図八八糎。五詞七六糎、五図九六糎。六詞一一一糎、六図九五糎。七詞二二糎、七図八一糎。八詞五一糎、八図一八五糎。中巻、詞書一〇段絵一〇段。一詞三二四糎、一図九八糎。二詞五八糎、二図一五九糎。三詞五六糎、三図九六糎。四詞八三糎、四図九五糎。五詞一三五糎、五図一五六糎。六詞二五四糎、六詞九五糎。七詞六六糎、七図九五糎。八詞七〇糎、八図九四糎。九詞八三糎、九図一五七糎。一〇詞一六九糎、一〇図九四糎。下巻、詞書一二段絵一一段。一詞五四糎、

一図一七七糎。二詞五五糎、二図九五糎。三詞一〇八糎、三図二三八糎。四詞一〇三糎、四図一二七糎。五詞一一七糎、五図一二二糎。六詞四二糎、六図一六〇糎。七詞一一三糎、七図九四糎。八詞一一一糎、八図九五糎。九詞五一糎、九図六四糎。一〇詞八七糎、一〇図一七二糎。一一詞四六糎、一一図九五糎。一二詞一〇二糎。

遊行上人縁起絵巻　一〇四七

絵巻（模写）十巻五軸。表紙、黒茶色無地絹。見返し、白無地。本文料紙、椿。題簽、左肩切箔紋様短冊「遊行上人縁起　一二（―九十）」。内題なし。寸法、縦三七糎。各巻の全長、第一軸一四米三一糎、二軸一六米九七糎、三軸一三米五二糎、四軸一八米三五糎、五軸九米九〇糎。各巻々末奥書、第一軸「寛政元年己酉閏六月　正通写」、二軸「寛政二年庚戌八月　住吉内記弟子写」、三軸「寛政元年己酉閏六月　正通写」、四軸「寛政元年己酉十二月　正通栄勢写」、五軸「寛政二年庚戌五月　住吉内記弟子写」。箱蓋貼付の識語には破損があるが、吉光小伝を掲げたあと、「広行小伝／氏ハ住吉、広守カ子、通称内記、号ヲ景金園ト云フ実ハ板谷慶舟広当カ子也、広守嗣ナク依テ門人ヨリ其師家ヲ嗣ク其画風活動アリテ人是ヲ賞ス、文化八年没ス、五十七歳、明治十六年迄□拾一年／遊□上人縁起画　天明八年筆ヲ起シ寛政二年（以下破損）」とあり、奥書にいう内記は住吉広行と見られる。本書は遊行上人縁起、光明寺本の詞書抜き挿絵のみの模本、絵は淡彩を施こす。但し三巻に二ケ所の錯簡があり、六・八・一〇巻の各巻末には小異がある。

〈付〉　右絵巻には以下の二点の折本一帖が別に添付されている。

遊行上人縁起絵巻、折本一帖。表紙、無地納戸色和紙。料紙、楮紙。題簽、中央「遊行上人縁起絵巻　全」。寸法、縦三三糎　横二七糎。同絵巻光明寺本の模写挿絵（詞書なし）有彩色、十六図。各図長短不同、順不同。右掲模写絵巻とは別筆。江戸中期写か。

〔遊行上人縁起絵巻〕　折本一帖。柿色和紙表紙。題簽中央、表記なし。料紙、鳥の子。寸法、縦三六・二糎横二六・〇糎。同絵巻光明寺本の一、二巻のうちの二図の模写（詞書なし）有彩色。江戸中期写か。

熊野御本地絵巻　一〇五〇

絵巻　三軸。表紙　薄紫色無地楮紙、上下破損。見返し、銀箔散らし。本文料紙、泥間合紙。軸、銅の嵌軸。本文挿絵とも料紙上下約四糎弱のところに界線あり、墨付の天地二三糎弱。題簽、上巻は剝落して佚。左肩金泥短冊、「熊野御本地　中(下)」。寸法、縦三〇糎、上巻全一〇米二七糎、中巻七米三一糎、下巻八米八七糎。各巻平均一紙五〇糎、挿絵上巻六図、中巻五図、下巻四図。やや古雅な風致ある奈良絵。室町末までの写か。全巻巻頭に鼠害破損があり、本文挿絵の一部を侵している。本書は横山重「室町時代物語集　第一」解題所掲の酒井宇吉氏旧蔵本。

文正物語絵巻　一〇五一

絵巻　三軸。表紙、薄茶色絹地に雷文繋ぎ梅花紋様。見返し、絹地、金泥松竹梅下絵。本文料紙、鳥の子。料紙裏にも金箔。補修時、本文料紙の全部にわたり表天地に幅一糎余の金泥紙を貼っている。題

簽、左肩に金泥下絵短冊、「文正物語　上（中・下）」。内題なし。寸法、縦二六糎。上巻、詞八段絵七段、全長六米九六糎。中巻、詞八段絵七段、全長六米九五糎。下巻、詞八段絵七段、全長七米三〇糎。絵は各巻一図幅一八糎で、描線細緻を極めた濃彩の奈良絵、天地に幅廣い金泥のすやり霞を描いている。本文も一紙一〇行、一四糎程度の紙を継いであり、もと冊子の奈良絵本から改装した可能性もある。江戸初中期の写。

〔文正草子絵巻〕　一〇五二

絵巻　二軸。表紙、無地紺紙鳥の子。下巻は表紙欠。見返し、金銀箔野毛散らし。本文料紙、鳥の子。詞書部分は、白・黄・薄紫・薄紅など着色した鳥の子紙を貼り混ぜている。題簽、内題なし。寸法、縦三二・五糎、上巻二二米二三糎、下巻一九米一五糎。本文は一行平均二四・五字に及ぶ細字。挿絵は上巻に二一図、下巻に一八図（紙幅不同）あるが、天地をすやり霞で区切ったやや土佐絵風の絵で白描、ごく一部に銀泥による彩色が見られるのみ。他絵巻からの模写挿絵を、本文中に切り継ぎしたものと見られ、詞・挿絵の移り目に本文の区切れなく、まま継ぎ目が切りこまれた箇所もある。本文未精査。江戸中期までの写か。

八幡之縁起　一〇五三

絵巻、二軸。表紙、薄茶色地に桐花紋様を織り出した絹地。見返し、金泥布目。本文料紙、金泥下絵鳥の子。縦三三糎、上巻全長一二米一八糎、下巻同一一米六〇糎。題簽、左肩金泥下絵短冊に「八幡之縁起　上（下）」。内題なし。挿絵、天地に金箔散らしのすやり霞のある濃彩の奈良絵。上巻、詞七段絵六図、下絵、詞九段絵八図。書写時代は江戸時代初期か。本書は下巻に一ケ所錯簡がある。横山重「室町時代物語集　第一」解題所出の楠林安三郎氏蔵本。

〔八幡縁起絵巻〕　一〇五四

絵巻、二軸。有缺。表紙、紺地に草木紋様を織り出した緞子。見返し、金銀箔散らし。本文料紙、鳥の子。題簽、内題なし。寸法、縦二六・五糎、上巻六米八七糎。下巻八米一六糎。尾題、下巻々末に「八幡大菩薩御縁起」とある。挿絵、上巻六図、下巻五図、大和絵風の淡彩画。なお、箱蓋裏面貼付の極書に、「八幡縁起　貳巻／元岩清水ニアリ　傳土佐隆親筆」云々とあり、隆親の閲歴を記入している。本書は原装時水害を受けたための破損剝落が全篇に亘っており、全巻補修を加えているが、随所に判読不能箇所あり、かつ再装の際に全般的に錯簡を生じている他、内容的にも缺脱があって一貫しない。横山重「神道物語集」翻刻所掲の享禄四年絵巻（散佚）と、些細な表記をのぞいて内容が一致し、同本とは直接的転写関係が想定されるが、同巻末の「右此御縁起　新寫之事」云々以下の奥書は本書にない。同絵巻に比し、約三分の一の内容を缺いている。室町時代末期までの写と考えてよい。

武家繁昌絵巻　一〇五五

絵巻　二軸。表紙、緑色絹地、金糸にて菊花紋様を織り出す。見返し金泥布目。本文料紙、金泥下絵鳥の子。題簽、上巻左肩「武家繁□」

以下剝落、下巻題簽缺。寸法、縦三二・五糎、上巻全長十一米八〇糎、下巻九米七一糎。上巻詞六段、絵五段。下巻詞五段、絵四段。挿絵は天地を金箔散らしのすやり霞で切った濃彩の奈良絵、やや漢画風な趣きあり。箱書、「公家為重卿筆　武家繁昌　二巻」蓋裏「福城□被御座舗拝領」。江戸中期写。

西行物語絵巻　一〇五六

絵巻（模写）二軸。残缺。表紙、緑地に金糸で松葉、牡丹花紋様を織り出した絹表紙。見返し、金泥布目。本文料紙、鳥の子。題簽、後補、上下巻とも左肩に「西行物語」とある。寸法、縦三二糎、上巻一二米三〇糎、下巻一〇米三六糎。上巻は詞一一段、絵一一段。下巻詞一一段　絵九段。詞書段は平均一紙四五糎程度の紙を継ぐ。本文中に朱・墨の書入れあり。挿絵は一紙不同、彩色あり。箱書、「西行物語、園権大納言基勝卿御筆／土佐守藤原光茂絵／外題　皆川愿筆」。本書内容は、流布絵巻、例えば渡辺家蔵西行物語絵巻（詞書三巻・絵三巻）に対比してみるに、上巻は、同本詞書第八段から一八段とそれに対応する各段の挿絵、下巻は詞書第二八段―三八段とそれに対応する各段の挿絵（三二、三四絵欠）に相当し、右を、各段詞書―挿絵の形で掲出する。江戸中期の写。

〔十二類絵詞〕　一〇五八

絵巻（模写）一軸。残缺。表紙、緑色絹地、葵紋様。見返し、金泥野毛散らし。本文料紙、鳥の子。題簽、内題等なし。寸法、縦一九・五糎、全長六米九七糎。内容、詞書四段、挿絵四段。挿絵は住吉派風、彩色あり。各図中に詞句の書入れがあるが、詞書とも流布絵巻とは異る。十二類合戦絵詞の異本系伝本の前半、二巻本の上巻か。江戸初期の写か。

〔天狗草紙絵巻〕　一〇五九

絵巻　一軸。茶色地絹、窠紋唐草紋様。紫色紐。見返し、銀箔散らし。本文料紙、鳥の子。題簽、左肩金泥紙、表記なし。内題なし。寸法、縦三一・五糎、全長二〇米八一糎。装幀補修。本文ルビ付き漢字、平仮名交じり。詞八段、絵八段。挿絵は図中に詞句の書入れがある極彩色の奈良絵。本書は一般に是害坊絵詞と称されるもの。添付、田中一松氏識語に「一般に是害坊絵と称す恐らく原本かと思はるゝもの大阪住友男爵家にあり只だ前の方を欠く残欠本である。京都曼殊院に二巻本ありこの本は内容殆ど曼殊院本と同じである。しかし画致は住友家本や曼殊院本と違い大分漢画風殊に狩野風の重碧彩色の固くなったものである。恐らく桃山時代の狩野派の作品から写したものと思はれる。江戸中期を下らぬであろう、住友家本は足利時代嘉吉頃と推定される（春聞日記所見）」とある。江戸中期写。

〔大江山絵詞〕（千丈獄）　一〇六〇

終巻　二軸。有缺。金糸で雷文繁ぎ唐草紋様を織り出した緑地絹表紙。見返し、金箔散らし。本文料紙、金泥下絵鳥の子、裏打ち補修。題簽後補、左肩短冊「千丈獄絵詞　上（下）」。寸法、縦三三糎、上巻全一五米。下巻全九米二六糎。本書は横山重「古浄瑠璃正本集　第一」所収の三巻の奈良絵巻「酒天童子」などと同系の絵巻と思われ

るが、現状は物語前半部を缺いている。もと三巻のものが散佚して、中下巻二軸となったものか。現上巻、詞書六段絵六段、下巻、詞書七段絵六段。一紙不同。挿絵は天地すやり霞に金箔を散らした細緻な奈良絵。江戸初中期の写。

〔長谷雄草紙絵巻〕　一〇六二

絵巻（模写）　一軸。表紙、茶色唐草紋様絹地。見返し、白。本文料紙、鳥の子。寸法、縦三四糎、全長一〇米二八糎。題簽、内題等なし。詞書五段、絵五段。奥書「天保十一年庚子季秋／泉春園臨写舊圖印」。流布模本の臨写。本文に短かい脱文一ケ所。挿絵彩色あり、構図に数箇所小異がある。

高野大師行状絵巻　一〇六三

絵巻　零本。一軸。表紙、茶色絹地に赤黄緑糸で宝尽くし刺繍。見返し、銀箔野毛散らし。題簽なし。内題、首行「高野大師行状圖畫第五」。本文料紙、楮紙。寸法、縦三三・五糎、全長四米五〇糎。本文は、内題の次行より、五巻の目次十二項を掲出し、八幡約諾以下、久米寺講経まで五巻前半の詞書四段、挿絵四図を掲げる。挿絵は彩色あり。箱書「西禅院栄龍四之」、内箱裏「寛永廿一年八月三日　栄伝教尊房」とある。本書は板本等十巻本系伝本の転写。江戸寛永期の写か。

松浦明神絵巻　一〇六四

絵巻　一軸。表紙、黄色地に金糸で唐草紋様を織り出した絹表紙。見返し、金泥布目鳥の子。本文料紙、金泥下絵を施した鳥の子。題簽、左肩「松浦」、以下の部分は剝落。内題なし。寸法、縦三三糎、全長一一米四〇糎。詞六段、絵六段。挿絵、金箔すやり霞を天地に描いた細緻な奈良絵。箱裏に極書「此一巻は豊臣氏時代の物にして絵筆者狩野派詞書堂上の筆也　庚申蘭月　古筆了雅印」がある。箱書「松浦明神」、外箱書「松浦明神絵巻」。江戸初期写。内容、藤原廣嗣乱に取材したお伽草子。

〔牛若丸鳥帽子絵詞〕　一〇六五

絵巻　一軸。残缺。表紙、納戸色無地紙表紙。見返し、部分金箔。本文料紙、鳥の子。題簽、左肩金泥紙、表記なし。内題なし。寸法縦二八・五糎。全長九米三三糎。現状は一紙約五十糎までの紙を二十紙継ぐが、全篇に甚しい錯簡があり、内容も大量の缺脱があって首尾整わない。しかし現存部分でみると、挿絵十七図は、ほゞ詞書と入りこみ型式で書かれた古雅は風致ある奈良絵で、本文とともに古態を存する。見返しに、蔵印「巴来徳」。舞の本「鳥帽子折」の断片的内容で全体の約三分の一。室町末から江戸初期までの写か。

〔一若丸絵巻〕　一〇六七

絵巻　残缺　一軸。表紙、鳥の子紺紙に金箔紋様あれど剝落。見返し、金泥雷紋繁ぎふう紋様。本文料紙、鳥の子。裏面銀箔散らし。本文上下に界線を施こす。題簽（後補）、左肩金箔散らし短冊、表記なし。内題なし。寸法、縦三〇糎、全長一三米一〇糎、詞八段絵七段。絵は上下すやり霞に金箔をおいた奈良絵。本書は「むらまつの物語」と呼ばれる室町末期お伽草子の二巻本絵巻の上巻。伝来の諸本多く

ないが、中で市古貞次「未刊中世小説解題」の本物語解説中に触れられた残缺絵巻（伝存不詳）が本書であろうと思われる。仮称の一若丸は主人公名。江戸初中期の写。

融通念佛縁起　一〇七四

絵巻（模写）　一軸。缺本。表紙、薄茶色もみ紙紋様和紙。見返し無地。本文料紙、薄様、裏打修補ずみ。題簽、なし。表紙に外題「融通念佛縁起」とうちつけ書き。寸法、縦四一・七糎、全長二〇米九七糎。内容、融通念佛縁起絵巻（二巻）の下巻全文。清涼寺蔵応永本の、下巻々頭光明遍照の段より、巻末、清涼寺融通大念佛の段に至る一一段一〇図と奥書の影写。詞書部分は下絵とともに文字を籠字で写す。挿絵は淡彩色。巻頭に久保田米齋の蔵印と思われる印記あり。箱書にも「久保田米齋模写」とする。

雛牡丹姫物語絵巻　一〇六六

絵巻　一軸。表紙、金糸で種々の小紋を織り出した絹地。見返し、金泥布目紙。本文料紙、鳥の子。題簽、左肩金泥短冊、文字剝落。内題「雛牡丹姫物語」。寸法、縦一五・七糎、全長四米一〇糎。内容はお伽草子「ささやき竹」。本書は挿絵に始まり、挿絵六図、本文六段。挿絵は天地わずかに雲形を付した極めて古樸な奈良絵。本文は料紙も長短不整、字詰め行どりにもむらが多い。途中に脱文一ケ所が想定され、末尾にも数行の缺落があるか。江戸初期までの写か。

文正草子　一〇八八

奈良絵本　列帖装横本二帖。表紙、金泥草木下絵、金箔散らしの紺紙鳥の子。見返し、金泥紙。本文料紙、鳥の子。題簽、表紙中央金泥下絵丹紙短冊、「ふんしやう　上（下）」。寸法、縦一七・四糎、横二五糎。一面一三行書き。上巻は挿絵九図（うち二図剝落）を含め墨付三七丁。下巻、首尾に遊紙各一丁、挿絵七図（うち見開き一図）を含め墨付四五丁。挿絵丁は極彩色奈良絵を合せ貼りにするが、上巻二ケ所の剝落あとなどに「文正常国　女子をはじめて見るづ」、「大宮司　ふんしょか事を物語しづ」、「ようの（マヽ）蔵人通繁をはじめ国司各々中将殿の御前ニ而四方山の物語之時文正がむすめのことをきゝてこがれたまうづ」、「中将殿文正が門にたちわづらいたまうて文正が家の下女立出てことのよしを尋るづ」等の切紙を添えてある。但し現存挿絵中に、右の切紙内容に相当するかと見られる図も存し、かつ、上巻を中心に本文・挿絵とも大幅な錯簡が見られるので、精査を要する。本文は寛永期刊行の丹緑大形本などと同系統か。江戸初期の写。

〔高野絵本〕　一〇九二

絵巻　一軸。残缺。表紙、茶色、窠文ふう紋様緞子。見返し、金粉散らし。本文料紙、鳥の子。題簽、内題等なし。寸法、縦二七糎、全長六米七三糎。彩色画長短不同八図を継ぐ。詞書なし。箱書、「高野山絵巻物」「高野絵本」。